ありふれた職業で世界最強　白騎士と創世の龍

Als_EX

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはごく普通の高校生白浪リュートが親友の南雲ハジメと白き龍と共に割とエンジョイしながら異世界を創り変える物語

目次

プロローグ ―― 1
1話　異世界 ―― 9
2話　ステータス ―― 15
3話　読書と特訓 ―― 27
4話　覚悟 ―― 36
5話　大迷宮 ―― 43
6話　喪失 ―― 52
7話　覚醒 ―― 58
8話　攻略開始 ―― 67
9話　再会 ―― 74
10話　互いの事情 ―― 81
11話　樹海到着 ―― 88
12話　到着 ―― 94
13話　会議 ―― 102
14話　訓練 ―― 118
15話　同行と再会 ―― 128
16話　変貌 ―― 136

プロローグ

月曜日。世の人々が憂鬱になるだろうその日を俺、白浪　リュートも嫌っていた。
そのせいで毎週日曜日は寝るのが遅くなり、次の日は寝坊しかける。いつもなら――

―

「おはようリュート。こんな時間に登校なんて珍しいね」
「おはようハジメ。今日は起こしてもらえなくって」
と、挨拶をしてきたのは俺の親友の南雲ハジメ。中学の頃からの付き合いで、父親がゲームクリエイター、母親が漫画家という根っからのオタクである。
そのまま色々と話しながら教室へ入りハジメの席で駄弁っていると
「おはよう！　南雲くんは今日もギリギリだね。もっと早く来ようよ。　リュートくんも珍しいねこんな時間に来るなんて」
今挨拶してきたのが白崎香織。学校でハジメにフレンドリーに接する数少ない例外の1人で男女問わず人気が高い。なにやらハジメのことが好きらしい。
「あ、あぁ、おはよう白崎さん」
「おはよう白崎、ちょっと起きられなくて」

そんな人物が割と事あるごとにハジメに話しかけているのだからハジメはかなり大変だろう。

白崎の会話の対象をこっちにずらしてハジメへのヘイトを減らしつつ話の切り上げ時を探していると、3人の男女が近づいてきた。

「南雲君。リュート。おはよう。今日も大変ね」

「香織、また彼の世話を焼いているのか？　全く、本当に香織は優しいな」

「全くだぜ、そんなやる気ないヤツにゃあ何を言っても無駄と思うけどなぁ」

今1人だけ挨拶をしたのは八重樫雫。ポニテがトレードマークの剣道少女で熱狂的なファンが結構多い。

見当違いなことを言ってるのが天之河光輝。容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能とお花畑な頭を除けば完璧な奴。

最後のが坂上龍太郎。脳筋な天之河の親友だ。

ちなみに白崎、八重樫、天之河、そして俺は幼馴染だったりする。

俺の親と八重樫の親が仲が良く、八重樫のところで剣道をやっていた。

中学の半ばくらいで辞めたけど一応交流は続いてる。

「おはよう八重樫」

「おはよう、八重樫さん、天之河くん、坂上くん。まぁ自業自得とも言えるから仕方ない

よ」
取り敢えず挨拶してきた八重樫には挨拶を返しておく。
八重樫も人気が高いが故に周りの嫉妬の目線がハジメに突き刺さる。
俺は幼馴染だから問題ないらしい。
「それが分かっているなら直すべきじゃないか？　いつまでも香織の優しさに甘えるのはどうかと思うよ。香織だって君に構ってばかりはいられないんだから」
天之河がまた的外れなことを言い出した。そもそもハジメは甘えてるつもりなんてないだろうし。
「いや～、あはは……」
まぁこの状況じゃ笑ってやり過ごすのが最適だろうな。
ちなみに俺がさっきから喋らないのは天之河と話したくないからだ。
「？　光輝くん、なに言ってるの？　私は、私が南雲くんと話したいから話してるだけだよ？」
こいつまた燃料を投下しやがった。昼休みとかハジメ大丈夫かな。
「え？　……ああ、ホント、香織は優しいよな」
こいつはこいつでほんとにどうしようもねぇな。
「……ごめんなさいね？　二人共悪気はないのだけど……」

「謝るならどうにかしてよ。まぁどうにか出来ないのは俺も知ってるけどさ」
謝ってきた八重樫に軽口を叩きつつ心の中で軽く労っておく。頑張れ。
そうこうしてるうちにチャイムがなって先生が入ってきた。何事もないかのように連絡事項を伝える。そしていつも通りハジメが居眠りし始め、授業が始まった。

授業は順調に進み昼休みに。ハジメもそろそろ目を覚ますはずだ。
「やぁ、朝はごめんね」
「ほんとだよ、そのせいで遅刻ギリギリになっちまった」
「それはリュートの自業自得でしょ」
「おっしゃる通り」
こいつは中村恵里。家族が訳アリで今はうちで保護してる。その辺の話はまたおいおいするとして。気付いたらオタクに染まってた隠れオタクの1人である。
ハジメも起きたし昼飯を用意する。って言っても今日は2人ともコンビニのパンだけど。
「やっほー南雲」

「うん、こんにちは中村さん」
　勿論オタクなので南雲とも仲が良い。昼休みはこうして3人で話しながら食べるのが基本になっており、あんまり人は近づいてこない。
　すぐハジメに寄ってくる”例外”はいるけど
「今日それだけでいいの？」
「うん、大丈夫。これ飲んだら少し寝るね」
「了解、出来るだけ静かにしとく」
　ハジメがゼリー飲料で昼を済ませようとするのを見てか、唯一の”例外”がニコニコしながら近寄ってくる。
　今日教室で食べたのは間違いだったか…ハジメも顔がちょっと青くなってる気がする。
「3人とも珍しいね、教室にいるの。お弁当？　私も一緒に食べていいかな？」
　教室の空気がどんどん重くなっていく。
　今日はすこぶる運が悪いな、ハジメ。
「あ～、ごめんね白崎さん。僕たちもう食べ終わっちゃったから天之河君達と食べたらどうかな？」
　そう言って飲み終わったゼリー飲料のパックを見せるハジメ。

それ逆効果じゃないか…？

「えっ！　お昼それだけなの？　ダメだよ、ちゃんと食べないと！　私のお弁当、分けてあげるね！」

やっぱりこうなった。

ハジメへの圧力がさらに強くなっていく。南無。

「香織。こっちで一緒に食べよう。南雲はまだ寝足りないみたいだしさ。せっかくの香織の美味しい手料理を寝ぼけたまま食べるなんて俺が許さないよ？」

今の状況だと割と救世主だな。言ってる事キモいけど。

「え？　なんで光輝くんの許しがいるの？」

「ブフッ…」

「ゲホッ…死ぬ……」

素で聞き返した白崎に思わず雫が吹き出し、恵里が咳き込んだ。

取り敢えず恵里の背中さすっとくか。

結果として誰も離れていかないのでハジメへの圧力は弱まりそうもない。

「僕ゴミ捨ててくるよ」

「ありがとう。助かる」

「ごめんありがと…ゲホッ……」

そう言ってハジメが立とうとした時だった。
天之河の足元に光り輝く円環と幾何学模様、つまるところ魔法陣が現れた。
魔法陣はどんどん大きくなり、光を増していく。
そうして魔法陣は教室全体にまで広がった。
生徒達は悲鳴を上げ教室はパニック状態に。
昼飯を食べに来ていた愛子先生が「皆さん！教室から出てください！」と叫ぶ。
それと同時に魔法陣は爆破したかのように強い光を放つ。
顔を手で覆い、目を閉じて光から目を守る。
しばらくして光が弱まったのを感じ、目を開けるとそこは教室ではなかった。
縦横１０メートルはありそうな壁画、大理石のような素材で出来た大きな広間、その奥辺りの台座の上に俺達はいた。
そしてそれを取り囲み祈りを捧げるようなポーズをした少なくとも３０人近い人達。
彼らは皆、法衣のようなものを着て、錫杖のようなものを側に置いていた。
その中の１人、一際豪華な衣装を着ている老人が歩み寄って来た。
そうして俺たちに対して落ち着いた声で言った。
「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシュタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しく

お願い致しますぞ」

1話　異世界

現在俺たちは場所を変え、大きなテーブルが並んだ大広間のようなところにいる。
こっちも凄く豪華な作りをしている。
晩餐会とかするような場所なんじゃないだろうか。
上座のあたりに先生と天之河たち４人が座り、その他は適当に座っている。
俺とハジメは最後方の辺りだ。
ここに来るまで皆があんまり騒がなかったのはまだ混乱しているからだろうか？
天之河が落ち着かせたのもデカそうだ。教師よりカリスマがあるって先生が涙目だったな。
全員座ったタイミングでカートを押したメイド達が入ってきた。
メイドは皆に飲み物を給仕していく。
凄いな、たまに夢に見てたやつだ。所作が綺麗だ。
色々考えながらメイドを見ていると全員に飲み物が行き渡ったのかイシュタルとかいう老人が話し出した。
「さて、あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。一から説明させて頂きま

すのでな、まずは私の話を最後までお聞き下され」
そうして語られたのはファンタジーでよくある、所謂テンプレというやつだった。
俺たちが来たこの世界はトータスというらしい。
まずトータスには人間族、魔人族、亜人族の3つの種族がある。
その内人間族と魔人族の2種族間で何百年も戦争をしてきた。
戦力はずっと拮抗していたが、最近それが崩れたらしい。
魔人族が魔物と呼ばれる特殊な野生動物を使役しだしたことが原因だとか。
その結果、現在人間族は絶滅の危機に瀕しているのだそうだ。
「あなた方を召喚したのは〝エヒト様〟です。我々人間族が崇める守護神、聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしょう。このままでは人間族は滅ぶと。それを回避するためにあなた方を喚ばれた。あなた方の世界はこの世界より上位にあり、例外なく強力な力を持っています。召喚が実行される少し前に、エヒト様から神託があったのですよ。あなた方という〝救い〟を送ると。あなた方には是非その力を発揮し、〝エヒト様〟の御意志の下、魔人族を打倒し我ら人間族を救って頂きたい」
イシュタルが恍惚とした顔をしている。
ジジイがそんな顔してもなぁ…

イシュタルによると人間族はほぼ全てがエヒトを崇めており、神託を聞くと聖教教会の高位の地位が確定するとか。

なんの疑いもなく、喜び勇んで神の言葉に従うのであろうこの世界の人々に言いようのない気持ち悪さを感じる。

ハジメも似たようなことを考えているのかすこし顔が青い気がする。

すると突然先生が声を上げた。

「ふざけないで下さい！　結局、この子達に戦争させようってことでしょ！　そんなの許しません！　ええ、先生は絶対に許しませんよ！　私達を早く帰して下さい！　きっと、ご家族も心配しているはずです！　あなた達のしていることはただの誘拐ですよ！」

威厳ある教師を目指しているらしい先生が理不尽な召喚理由に対して怒りをあらわにする。

生徒はその姿にほんわかしていたが、次のイシュタルの言葉に凍りついた。

「お気持ちはお察しします。しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」

は……？

今こいつ帰れないっつったか？

「ふ、不可能って……ど、どういうことですか!?　喚べたのなら帰せるでしょう!?」

聞き間違いじゃなかったらしい。
「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意思次第ということですな」
「そ、そんな……」
生徒達がどんどん騒ぎ始める。
「うそだろ？　帰れないってなんだよ！」
「いやよ！　なんでもいいから帰してよ！」
「戦争なんて冗談じゃねぇ！　ふざけんなよ！」
「なんで、なんで、なんで……」
どんどんパニックなる生徒達。
俺はというとそこまで焦ってはいなかった。
一応まだマシなパターンだったからだ。
しばらくパニックは続きそうだな…
なんて思いながら皆を眺めていると、天之河が立ち上がってテーブルを叩いた。
その音に驚き天之河に注目が集まる。
それを見て天之河が話し出す。

「皆、ここでイシュタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシュタルさん？　どうですか？」

「そうですな。エヒト様も救世主の願いを無下にはしますまい」

「俺達には大きな力があるんですよね？　ここに来てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうです。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

何を言ってるのかわかってるのかコイツ……

だが天之河の力は絶大で、皆が少しずつ落ち着いてきた。

「へっ、お前ならそう言うと思ったぜ。お前一人じゃ心配だからな。……俺もやるぜ？」

「龍太郎……」

「今のところ、それしかないわよね。……気に食わないけど……私もやるわ」

「雫……」
「え、えっと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ！」
「香織……」
いつもの面子が天之河に賛同する。その流れでクラスメイトがそれにどんどん賛同していく。
そのまま戦争は全員参加になった。
皆はその意味が分かっているんだろうか？
チラッとイシュタルを見ると、彼は笑みを浮かべていた。
こうなるように天之河を誘導したんだろうか。
俺はコイツを絶対に信じないことにした。

2話　ステータス

俺たちは今魔法で動く昇降機みたいなのでハイリヒ王国とやらに向かっている。
俺たちがいたのが聖教教会の総本山である神山。その麓にあるらしい。
話は真面目に聞いてなかったがかなり密接な関係なんだろう。
王国の王宮に着くとまず玉座の間に通された。
国王っぽい人がイシュタルの手の甲にキスしてたから教会の方が立場が上なんだろうな。
今回呼ばれたのはただの自己紹介だったっぽい。
国王がエリヒド、王妃がルルアリア、王女がリリアーナ、王子がランデルとそれぞれ名乗った。
その他地位の高い人たちの紹介でこの場は終わった。
ちなみにだがランデルが白崎をチラチラ見てた。王子、多分無理だ、諦めろ。
その後は晩餐会が開かれた。
何やら怪しい色の料理が沢山出て来たが美味しかった。
その際、王宮での衣食住の保障についての説明と訓練における教官の紹介がされた。

教官が全員現役なのはいつか一緒に戦うからだろうか。
晩餐会が終わり、1人1つ割り当てられた部屋に案内された。
「でっか……」
でかい。
部屋もベッドもでかい。
ベッドに至っては天蓋まで付いてる。
今夜寝れるかな…

翌日から訓練と座学が始まった。
ちなみにだが昨日は結構ぐっすり寝れた。
最初に12×7cmくらいのサイズの銀色のプレートが配られた。
なんとなくプレートを眺めていると、騎士団長のメルド・ロギンスが説明を始めた。
「よし、全員に配り終わったな？　このプレートは、ステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすなよ

？」

なんか割と気楽な感じで大丈夫そうだ。

騎士団長だからもっと畏まったタイプの人なのかと。

説明は続く。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。〝ステータスオープン〟と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くなよ？　そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

「アーティファクト？」

天之河が聞きなれない言葉に質問をする。

「アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属けんぞく達が地上にいた神代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。身分証に便利だからな」

皆納得したのかステータスプレートの魔法陣に血を擦り付け始める。

取り敢えずやるしかないか…

皆と同じように血を擦り付けると

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

白浪リュート　１６歳　男　レベル：1

天職：騎士

筋力：１００

体力：７０

耐性：５０

敏捷：８０

魔力：３０

魔耐：２０

技能：風属性適正［＋雷属性］・剣術・槍術・気配感知・魔力感知・言語理解

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

と表示された。

が、次の瞬間プレートにノイズが走る。

「おわっ!?」

驚いて変な声でちゃった。聞かれてないかな?

軽く見回したら恵里がこっち見てた。ちょっと恥ずかしい。
ノイズはすぐに治ったが、問題はステータスの方だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

白浪リュート　１６歳　男　レベル：1

天職：龍騎士

筋力：１５０

体力：１００

耐性：１２０

敏捷：１８０

魔力：３５０

魔耐：２５０

技能：全属性適正・全属性耐性・複合魔法・剣術・槍術・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解・器

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

なんかヤケクソ強化されたみたいになった。
天職も変わってるし、技能も増えてるし、何より最後の〝器〟が不穏すぎる。
「全員見れたか？　説明するぞ？　まず、最初に〝レベル〟があるだろう？　それは各

ステータスの上昇と共に上がる。上限は１００でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。レベル１００ということは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。そんな奴はそうそういない」

たまによくあるステータスが上がって初めてレベルが上がるタイプか。

「ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法具で上昇させることもできる。また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。詳しいことはわかっていないが、魔力が身体のスペックを無意識に補助しているのではないかと考えられている。それと、後でお前等用に装備を選んでもらうから楽しみにしておけ。なにせ救国の勇者御一行だからな。国の宝物庫大開放だぞ！」

魔物を倒すだけじゃそんなに上がらないのか、ちょっと面倒だな。

「次に〝天職〟ってのがあるだろう？　それは言うなれば〝才能〟だ。末尾にある〝技能〟と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。戦闘系天職と非戦系天職に分類されるんだが、戦闘系は千人に一人、ものによっちゃあ万人に一人の割合だ。非戦系も少ないと言えば少ないが……百人に一人はいるな。十人に一人という珍しくないものも結構ある。生産職は持っている奴が多いな」

龍騎士ってどんなやつなんだ…？

近接寄りなのは技能とかからなんとなくわかるが。

「後は……各ステータスは見たままだ。大体レベル１の平均は１０くらいだな。まぁ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！　全く羨ましい限りだ！　あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなきゃならんからな」

それが本当ならとんでもないチートだな。

「ねぇ、ステータスどう？」

と、恵里が話しかけてきた。そういやあんまり話せてなかったな。

「ボクはこんな感じ」

とステータスプレートを見せてきた。

＝＝

中村恵里　１７歳　女　レベル：１

天職：降霊術師

筋力：３０

体力：５０

耐性：４０

敏捷：３０

魔力：１２０

魔耐：８０
技能：降霊術・闇属性適正・火属性適正・高速魔力回復・言語理解
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「まぁこれが普通だよなぁ」
「？」
　取り敢えず俺のプレートを見せようとすると…
「ほお～、流石勇者様だな。レベル１で既に三桁か……技能も普通は二つ三つなんだがな……規格外な奴め！　頼もしい限りだ！」
「いや～、あはは……」
　天之河がプレートをメルドさんに見せたようだ。
　やっぱりアイツが勇者か。
　それは置いといてプレートを恵里に見せる。
「は？」
　そりゃやそんな反応するわな。
「流石にちょっと高すぎじゃない？」
「だよなぁ…」
「あと器は多分厄介なやつだよ」

「俺もそう思う」
　２人でコソコソ話している間にもステータスプレートの報告は続く。
「そういえば南雲は？」
「ちょうどだな」
　ハジメがメルドさんにプレートを渡す。
　受け取った団長の表情が「うん？」と笑顔のまま固まり、ついで「見間違いか？」というようにプレートをコツコツ叩いたり、光にかざしたりする。そして、ジッと凝視した後、もの凄く微妙そうな表情でプレートをハジメに返した。
「ああ、その、なんだ。錬成師というのは、まぁ、言ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときに便利だとか……」
「おぅふ」
　これはマズい。
　多分奴らが調子に乗るぞ。
「おいおい、南雲。もしかしてお前、非戦系か？　鍛冶職でどうやって戦うんだよ？　メルドさん、その錬成師って珍しいんっすか？」
「……いや、鍛冶職の十人に一人は持っている。国お抱えの職人は全員持っているな」
「おいおい、南雲～。お前、そんなんで戦えるわけ？」

檜山大介がハジメに絡みだす。
俺がハジメと一緒にいることが多くなってから絡んでこなくなってたが、異世界に来て気でも大きくなったのか？
「さぁ、やってみないと分からないかな」
「じゃあさ、ちょっとステータス見せてみろよ。天職がショボイ分ステータスは高いんだよなぁ～？」
「あれ、大丈夫？」
「マズいかもな」
ハジメは投げやり気味にプレートを渡す。
流石にそこまで低くはないだろ。
「ぶっははは～、なんだこれ！　完全に一般人じゃねぇか！」
「ぎゃはは～、むしろ平均が１０なんだから、場合によっちゃその辺の子供より弱いかもな～」
「ヒァハハハ～、無理無理！　直ぐ死ぬってコイツ！　肉壁にもならねぇよ！」
反応からして俺の想定よりも随分下らしい。
「こらー！　何を笑っているんですか！　仲間を笑うなんて先生許しませんよ！　ええ、先生は絶対許しません！　早くプレートを南雲君に返しなさい！」

先生が檜山達に怒りをあらわにする。
毒気でも抜かれたのか檜山はプレートをハジメに返す。
先生はハジメに向き直り、励ますように肩を叩いた。
「南雲君、気にすることはありませんよ！　先生だって非戦系？　とかいう天職ですし、ステータスだってほとんど平均です。南雲君は一人じゃありませんからね！」
そう言って愛子先生はハジメに自分のステータスを見せた。
ハジメが遠くを見つめだした。目はもう死んでいる。
「あれっ、どうしたんですか！　南雲君！」とハジメをガクガク揺さぶる愛子先生。
「ダメみたいだね」
「俺らじゃ慰めることすらできないしなぁ」
そんなこんなで順番が回り俺たちのところまで来た。
恵里はありきたりな感じの説明を受けて終わった。
降霊術師は名前の通り死体を操ったりできるらしい。
問題は俺だな。
「よし、お前が最後だな。プレートを見せてくれ」
俺は大人しくプレートを渡す。
「なっ…」

予想通り通りの反応だ。

「もの凄いステータスだな。技能も多く、汎用性が高い。ただこの天職は聞いたことがないな…器という技能も同じだ」

メルドさんも知らないらしい。

「装備は取り敢えず俺たち騎士団のものに近いものを支給しよう。騎士と付いているから問題はないはずだ。」

一波乱あったものの、最初の訓練は始まった。

3話　読書と特訓

初めての訓練から2週間くらい。
俺は訓練の合間を縫ってハジメと図書館に来ている。
基本的に魔物とか鉱石とかについて調べてる感じだ。
初見殺しだけは避けたいしな。
「はぁ～」
ハジメが溜息をついて本を放り出した。
気持ちはわかるがちょっと控えて欲しい。
司書さんがめちゃくちゃこっち睨んでるから。
ハジメがこんな感じになったのには理由がある。
ステータスのことだ。
まずこれが最初のステータス。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
南雲ハジメ　17歳　男　レベル：1
天職：錬成師

筋力：１０
体力：１０
耐性：１０
敏捷：１０
魔力：１０
魔耐：１０
技能：錬成・言語理解
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そしてこっちが今のステータス。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
南雲ハジメ　１７歳　男　レベル：2
天職：錬成師
筋力：１２
体力：１２
耐性：１２
敏捷：１２
魔力：１２

魔耐：１２
技能：錬成、言語理解
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そう、全然上がってない。
別に訓練をサボっていた訳ではないし、なんなら人一倍張り切ってやってたはずなんだけどな。
しかも魔法の適正もないらしい。
細かいところを端折って説明すると、この世界では適正のあるなしによって魔法を使うのに必要な魔法陣の大きさが変わる。
今のハジメでは初級の魔法〝火球〟を放つのに大体直径２ｍくらい必要なんだとか。
ステータスが低く近接戦闘は出来ない。魔法も使えない。
そうしてクラスの中で無能のレッテルを貼られてしまった。
どうにか出来ないかなぁ…
例えば……

「銃でもあればなぁ……」
「え?リュート今なんて?」
「いや、銃でもあればハジメも無能呼ばわりされなくなるかなって」

「そうか…銃か……」
　ハジメが考え込み始めた。
「ちょっと考えてみよう」
　そう言ってハジメは現状銃を作れるかについて話だした。
「構造についてはどうにでもなる。リボルバー式ならそこまで複雑じゃないし。ただ素材の問題が大きい」
「そもそもこの世界って火薬あるのか?」
「そう、そこなんだよ。火薬が出回っているかどうかがわからないから地球と同じものは作るのが厳しい。だから発射機構に魔法とかつかえないかな?」
「魔法か…そうなると強度の問題が……「すみません」」
　いきなり話しかけられたので驚きながらそっちを向くと今にもブチギレそうな司書さんがいた。
「静かにしていたたけますか?」
「「すいませんでした」」
　どうやら白熱しすぎて知らぬ間に声が大きくなっていたようだ。
　ほんとうに危なかった。出禁はキツいしな。
「この話はまた今度かな」

「そうだな」
そうしてハジメは読書に戻る。
俺は読み終わったから新しい本を探しに行くか。
本棚の間を彷徨っていたとき、ふと目に入ったとある本に手が伸びる。
「神エヒトと白き龍？」
どうやらこの世界の神話について書いてあるらしい。
内容を要約すると、創世神エヒトとその眷属の白い龍が人々に対して行ったこと、そして龍の最期が語られていた。
「白き龍は魔人族側についた赤き龍と相討ちになり、今は教会の下で眠っているねぇ……」
本当なら見てみたいものだ。
何かの拍子に復活したりしないかな？
「って時間やべぇ！」
時間も忘れて本を読み耽っていたようだ。
急いで本を元に戻し、訓練場へと向かう。

「なんとか間に合った……」
訓練が始まる前にギリギリ訓練場に着くことができた。
が、ハジメがいない。
図書館にはいなかったのは確認済みだ。
「嫌な予感がする…」
そんな予感に頼りながら訓練場を走り回っていると、皆から死角になるところに檜山達とハジメがいた。
どう見てもリンチしてる。
「アイツら魔法まで使おうとしてやがる！」
俺は全速力で走り、ハジメに向かう魔法を背負っていた槍で掻き消した。
「しっ、白浪…」
「そんなんだからモテねぇんだよバーカ。…さて、ハジメをいたぶった落とし前はどうつけてやろうか」
そう言いながら檜山達にゆっくり近づいていく。その時だった。
「何やってるの!?」

白崎御一行の登場だ。
あからさまに「ヤベッ」って顔したなアイツら。
「いや、誤解しないで欲しいんだけど、俺達、南雲の特訓に付き合ってただけで……」
「南雲くん！」
白崎は檜山の弁明は聞かず、ハジメに走り寄る。
「特訓ね。それにしては随分と一方的みたいだけど？」
「いや、それは……」
「言い訳はいい。いくら南雲が戦闘に向かないからって、同じクラスの仲間だ。二度とこういうことはするべきじゃない」
「くっだらねぇことする暇があるなら、自分を鍛えろっての」
檜山はボコボコに言われて決まりが悪そうに去っていった。
是非もないね。
「あ、ありがとう。白崎さん。リュートも。助かったよ」
「あんま間に合ってなかったけどな」
取り敢えず魔法だけは防げてよかった。
「いつもあんなことされてたの？　それなら、私が……」
あー……結構ちゃんとキレてるな……

檜山が去っていった方をめちゃくちゃ睨んでる。
「いや、そんないつもってわけじゃないから！　大丈夫だから、ホント気にしないで！」
「でも……」
ハジメは大丈夫と重ねて言う。それに白崎も渋々だが引き下がる。
「南雲君、何かあれば遠慮なく言ってちょうだい。香織もその方が納得するわ」
八重樫の気遣いにも感謝の言葉を言うハジメ。
俺としてもそれはありがたい。
ハジメはなんでも抱え込む癖があるからな。
「だが、南雲自身ももっと努力すべきだ。弱さを言い訳にしていては強くなれないだろう？　聞けば、訓練のないときは図書館で読書に耽っているそうじゃないか。俺なら少しでも強くなるために空いている時間も鍛錬にあてるよ。南雲も、もう少し真面目になった方がいい。檜山達も、南雲の不真面目さをどうにかしようとしたのかもしれないだろ？」
あぁもうコイツホント嫌い。
何をどう考えたらそんな結論になるんだよ。
「ごめんなさいね？　光輝も悪気があるわけじゃないのよ」
「アハハ、うん、分かってるから大丈夫」

八重樫もハジメも大変だなぁ…

「ほら、もう訓練が始まるよ。行こう？」

そうハジメに促され、訓練場に戻る。

ハジメのことは今まで以上に気にかけておくか…

訓練も終わり、いつもなら夕飯まで自由時間なのだが、今日はメルドさんに呼び止められた。大事な話があるそうだ。

「明日から、実戦訓練の一環として【オルクス大迷宮】へ遠征に行く。必要なものはこちらで用意してあるが、今までの王都外での魔物との実戦訓練とは一線を画すと思ってくれ！　まぁ、要するに気合入れろってことだ！　今日はゆっくり休めよ！　では、解散！」

思ったより早かったな…

これから大変そうだ…

４話　覚悟

【オルクス大迷宮】
全１００層からなるとされる大迷宮。
七大迷宮と呼ばれるものの一つで、進む毎に魔物が強くなっていく。
階層によって魔物よ強さを測りやすいため、新人の訓練によく使われる。
今俺たちはその【オルクス大迷宮】に挑戦するために、メルドさん含む騎士団数名と宿場町ホルアドにある王国直営の宿屋にいる。
「久々の普通サイズのベッドだな」
「そうだね」
俺はハジメと相部屋になった。
あんまり関わりがないやつじゃなくてよかった。
そこからはしばらくはお互い話さず読書していた。
が、
「僕もう寝るね」
といって寝る準備をするハジメ。

「おう、おやすみ」
そう返すとハジメは布団に入り目を閉じた。
そんな時だった。
「南雲くん、起きてる？　白崎です。ちょっと、いいかな？」
白崎の声だ。
ハジメは…寝れてないみたいだな。
ハジメが起き上がり、嫌々扉を開けに行く。
「……なんでやねん」
「えっ？」
何かあったんだろうか？
気になって様子を見に行くと、白崎がだいぶアレな格好で立っていた。
「あ～いや、なんでもないよ。えっと、どうしたのかな？　何か連絡事項でも？」
「ううん。その、少し南雲くんと話したくて……やっぱり迷惑だったかな？」
「……どうぞ」
「…俺は少し外歩いてくる」
おそらく2人きりの方が良いだろう。
俺は宿屋から出て、近くのベンチに腰掛ける。

なんとなくステータスプレートを眺める。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

白浪リュート　１６歳　男　レベル：１０
天職：龍騎士
筋力：３５０
体力：１８０
耐性：２４０
敏捷：４００
魔力：８００
魔耐：６５０
技能：全属性適正・全属性耐性・複合魔法・剣術・槍術・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解・器

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「どうしたの？」
「おわっ!?」
びっくりした。
気づいたら恵里が隣にいた。

「そっちこそどうしたんだ？」
「リュートが外に出て行くのを見かけて、気になったから追いかけてきた。ハジメと何かあったの？」
「いや、ハジメとはなにも。ちょっとハジメに客が来ただけだよ」
プレートを仕舞いながら軽く話す。
それからしばらく会話はなかった。
不意に恵里が話し始める。
「明日、魔物と戦うんだね」
声からはかなり不安であることが窺える。
「ボクはまだ怖いよ」
「俺だって怖いよ」
魔物と戦うのだって、生き物を殺すのだって。
「でも、覚悟を決めなきゃ」
生きる為に、地球へ帰る為に。
「俺は死ねないから」
でも、それはそれとして。
「あぁ、でも恵里だけは死んでも守るから」

「え？」
「だから、大丈夫」
そう言って恵里の目を見る。
すると恵里は少し笑った。
ちょっとは気が楽になったみたいだな。
「なんで笑うんだよ」
「アハハ…いや、リュートは変わらないんだなって」
「そうか？」
「うん。…ねぇ、ボク達が初めて会った時のこと覚えてる？」
「ああ」
小学生の頃、家の方向が同じだった為、剣道終わりは天之河とよく一緒に帰っていた。
その頃は今ほど嫌いじゃなかった。
そんなある日、いつもの橋を通りかかったとき、橋から落ちようとする同じ歳くらいの子供が見えて、天之河と2人で止めた。
その子供が恵里だった。
何があったのか天之河がしつこく聞き出そうとし、しばらくして根負けしたのかゆっくりと話しだした。

「父親の厳しい躾を受けて母親に助けを求めたが、母親も自分を叱り、相談出来る友達もおらず、誰も助けてくれないことを悲しんで自殺しようとした」とこんなようなことを言っていたはずだ。

それを聞いた天之河が「俺が恵里を守ってやる」と言っていたのを覚えてる。

そのあと帰ろうとしたが、その時の俺は行動力が化け物だった。

俺は「そんなに辛いなら俺の家においでよ」と提案した。

恵里もそれを承諾、一緒に家に帰ることになった。

多分父さんも母さんも困惑しただろうが、事情を説明するとすぐに許可をくれた。

そうして今まで一緒に暮らしてきたのだ。

「あの時もボクのことを守ろうと、安心させようと必死だったなって」

「そんなに必死だったっけ？」

「うん。あの日のことは今でも昨日のことのように思い出せる」

そう言って恵里は目を閉じる。

それから1分くらいたっただろうか。

「ありがとう。だいぶ安心できた」

「それならよかった」

「明日はよろしくね」

「任せろ」
それからはしばらく雑談しながらゆっくりと宿屋へ向かって歩いていく。
「じゃあ、おやすみ」
「おやすみ」
そう言って2人はそれぞれの部屋に戻っていく。
部屋に入ると既にハジメは寝ていた。
あの言葉を”嘘”にしないようにしないとな。
そんなふうに考えながら俺は眠りについた。

5話　大迷宮

俺達は今、【オルクス大迷宮】の入口の前の広場に集合している。
洞窟みたいな薄暗い入口をイメージしてたが、なんというか博物館とかみたいな感じになってる。
ここでステータスプレートを確認し、出入りを記録することで、死亡者の数を把握しているらしい。
広場は露店が並び、人も多く、お祭りのようだ。
この迷宮、浅い層は良い稼ぎ場所として人気が高いらしく、そのため人がどんどん集まってくる。
多分そういう人達を狙ってるんだろう。
俺達はキョロキョロ周りを見ながらメルドさんについて迷宮へと入っていった。

中は外とは全く違い、とても静かだった。
壁に埋まっている緑光石という鉱物のおかげで明かりがなくても割とよく見える。

この【オルクス大迷宮】は、本来緑光石を掘る為の坑道だったんだとか。
隊列を組みながらしばらく進むと、大きな広間に出た。
しばらく周りを見渡していると、壁の隙間から灰色の大きな毛玉が出てくる。
「よし、光輝達が前に出ろ。他は下がれ！　交代で前に出てもらうからな、準備しておけ！　あれはラットマンという魔物だ。すばしっこいが、たいした敵じゃない。冷静に行け！」
ラットマンは灰色の体毛に覆われたムキムキで二足歩行のネズミである。
ただし、胸筋と腹筋の部分は毛が生えていない。
迎撃には俺と天之河、坂上、八重樫、白崎、恵里、谷口とあと女子2人が行う。
前衛の4人が前線を抑え、後ろの数人が魔法で吹き飛ばすシンプルな作戦だ。
ラットマンを後ろに行かないようしばらく適当にあしらっていると、魔法の準備ができたみたいだから少し下がる。
「「暗き炎渦巻いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ――〝螺炎〟」」
3人が同時に放った魔法でラットマンがどんどん燃えていく。
気付いた時には広間のラットマンは全滅していた。
「ああ～、うん、よくやったぞ！　次はお前等にもやってもらうからな、気を緩めるなよ！」

想定以上だったのか、メルドさんは苦笑いを浮かべている。
「それとな……今回は訓練だからいいが、魔石の回収も念頭に置いておけよ。明らかにオーバーキルだからな？」
そうだった。ちゃんと覚えとこ。
そこからは特に問題もなく、交代しながら戦闘を繰り返していった。
そして、一流か否かを分ける２０階層に到達した。
俺達は戦闘経験はほとんどないが、ステータスで軽くゴリ押してきた。
というのもあるが、実際には騎士団の人達が誘導してくれているのが大きい。
この迷宮、即死級のトラップがあることもあるらしい。
そんなトラップの有無を騎士団の人達が確認してくれているおかげでここまで早く、安全に来られたのだろう。
「よし、お前達。ここから先は一種類の魔物だけでなく複数種類の魔物が混在したり連携を組んで襲ってくる。今までが楽勝だったからと言ってくれぐれも油断するなよ！
今日はこの二十階層で訓練して終了だ！　気合入れろ！」
よく響く声でメルドさんが発破を掛ける。
しかし、特に何も起こらず順調に進んでいく。
小休止に入り、白崎とハジメがラブコメみたいなことしてるのを眺めながら出来る限

り体を休める。
しばらくして、また２０階層の探索を再開する。
とは言っても既に４７階層までマッピングは終わっており、特に何かが起きることはない。
２０階層の１番奥の部屋。鍾乳洞のような複雑な地形をしたこの部屋の先に２１階層への階段があるらしい。
そこに着けば今日の訓練は終了となる。
ん……？
何か居る。
取り敢えず武器を構える。
「擬態しているぞ！　周りをよ～く注意しておけ！」
この辺りの階層で擬態する魔物は…ロックマウントか？
と、前方の壁が変色し、動き出した。
当たりみたいだな。
「ロックマウントだ！　二本の腕に注意しろ！　豪腕だぞ！」
坂上が飛びかかってきたロックマウントを抑え込んだので、天之河、八重樫と一緒に囲もうとするが、足場が悪く、上手くいかない。

坂上を突破できないと判断したのか、ロックマウントは後ろに下がる。
そして、体をのけぞらせ、大きく息を吸った。
その直後、
「グゥガガガァァァァァァアーーーー!!」
ロックマウントから強烈な咆哮が放たれた。
「ぐっ!?」
「うわっ!?」
「きゃあ!?」
「っ……!」
ロックマウントの固有魔法〝威圧の咆哮〟。
魔力を乗せた咆哮で、一時的に相手を麻痺させることが出来る。
俺はギリギリ耳を塞げたからよかったものの、他の3人は皆モロに食らったようで、一瞬動きを止めた。
ロックマウントはその隙に突進……ではなく、そばにある岩を後衛組に向かって投げる。
白崎達後衛は魔法で迎撃しようとするが、衝撃的なものを見て、動きを止めてしまった。

実はロックマウントが投げた岩、これもまたロックマウントだったのだ。
驚いて魔法の詠唱を止める後衛組。
マズイ…！
他の3人より早く動けた俺は投げられたロックマウントの対処に向かう。
走っても追いつかない…
それなら！
俺は持っていた槍を地面に向け、詠唱を開始する。
イメージは……バルファルク！
槍の先から風属性の魔法を放ち、一気に加速する。
そのままの勢いで、腰に下げていた剣でロックマウントを切り裂く。
「大丈夫!?」
「う、うん」
流石にキモかったのか、顔が青ざめている。
「貴様……よくも香織達を……許さない！」
何故かキレている天之河に呼応するように、聖剣が輝きだす。
あ、あんの馬鹿野郎！
「万翔羽ばたき、天へと至れ――〝天翔閃〟！」

「あっ、こら、馬鹿者！」
メルドさんの声も無視し、天之河は剣を振り下ろす。
聖剣の光が、そのまま斬撃となって放たれ、ロックマウントを切り裂き、ついでに奥の壁もぶっ壊した。
キラキラした笑顔で振り向き、何か言おうとした天之河に、メルドさんが拳骨を入れる。
「へぶぅ!?」
「この馬鹿者が。気持ちはわかるがな、こんな狭いところで使う技じゃないだろうが！
崩落でもしたらどうすんだ！」
申し訳無さそうに縮こまり、謝罪する天之河。
そこに他の面子が寄ってきて天之河を慰める。
「……あれ、何かな？　キラキラしてる……」
白崎が呟き、指を指す。
その方向に全員が顔を向ける。
青白く発光し、花のように壁から生える鉱物。
水晶のようなその見た目に、女子はうっとりとした表情をする。
「ほぉ～、あれはグランツ鉱石だな。大きさも中々だ。珍しい」

大雑把に言えば宝石の原石。この鉱石を加工した指輪にイヤリング・ペンダントなどは、贈り物として人気が高く、求婚の際に選ばれる鉱石トップ3のうちの一つなんだとか。

「素敵……」

メルドさんの説明を聞き、さらにうっとりとする白崎。

今白崎がハジメの方をチラ見したのは気のせいではないだろう。

「だったら俺らで回収しようぜ！」

そう言って突然動き出し、どんどん壁を登っていく檜山。

「バカ！さっさと戻れ！」

「こら！　勝手なことをするな！　安全確認もまだなんだぞ！」

流石に度を過ぎている行為に戻ってくるよう叫ぶが、全く聞き入れず、遂には鉱石までたどり着いてしまった。

「団長！　トラップです！」

「ッ!?」

警告は一歩遅かった。

檜山が鉱石に触れたとたん、鉱石を中心に魔法陣が一瞬で部屋中に広がる。

「くっ、撤退だ！　早くこの部屋から出ろ！」

メルドさんの言葉に、急いで部屋から出ようとするが、間に合わず部屋が光に包まれた。

一瞬の浮遊感の後、空気が変わる。

なんとか尻餅を付かずにいられた俺は辺りを警戒して見回していた。

俺達が転移したのは大きな石造りの橋の上その中間地点。橋の下は何も見えないくらいの大穴が空いていた。落ちたらひとたまりもないだろう。

橋の両側には奥への通路と上への階段が見える。

「お前達、直ぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け。急げ！」

だが、そう簡単にはいかなかった。

階段の方に魔法陣が現れ、そこから大量の魔物が湧き出てくる。

さらに反対側にはとてつもなく巨大な影が姿を現した。

――まさか……ベヒモス……なのか……

6話　喪失

”ベヒモス”

数多のＲＰＧにおいて登場し、主人公達の壁となるモンスター。

それと同じ名を冠するその魔物は、その名に恥じない体躯と強い殺意を持って俺たちの前に姿を現した。

反対側からはトラウムソルジャーと言う名の骸骨が湧き出てくる。

Ｔｒａｕｍ（殺到する）の名の通りどんどん増えていく。

もう１００は超えただろうか。

ベヒモスは６５層に生息し、昔最強と言われた冒険者が一切歯が立たずに負けたと言われる正真正銘の化け物。

今の俺たちで勝てるはずがない。

「グルァァァァァァァァ!!」

「ッ!?」

――だめだ。

あんなのと戦っても死ぬだけだ。

嫌だ。
死にたくない…
俺は退路を確保するという言い訳をしてトラウムソルジャーに向かっていった。
幸いトラウムソルジャーはさほど強くなく、一撃で倒せる。
だがいかんせん数が多い。
それに皆混乱して連携もクソもない。
こういう時に使えるヤツは実力差を考えずベヒモスに突っ込んでった。
どうする…どうすればいい……
その時、甲高い音とともに騎士団の人達が張っていた障壁が砕け散った。
その音に驚き騎士団の方を見た。
「ハジメ……?!」
最前線にハジメがいた。
あの４人はまだベヒモスとやり合うつもりらしい。
天之河の〝神威〟が直撃した。極光が辺りを塗り潰す。
光が収まったそこには、無傷のベヒモスが佇んでいた。
頭を振り上げたベヒモスのその頭が赤く染まっていく。
そのままベヒモスはその巨体から考えられないほど飛び上がり、天之河に向かって落

ちていく。
なんとか避けたが衝撃で吹き飛ばされたようだ。
どうやら限界のようだ。
今度はメルドさんを狙ってベヒモスが飛び上がる。
ギリギリで避け、魔法で瓦礫を散らしてほぼ無傷で凌ぐ。
その攻撃で頭が橋に刺さって抜けなくなったベヒモスにハジメが飛びついた。
錬成で足止めを行っているらしい。
その隙に騎士団の人達とあの４人が撤退してくる。
ようやくなんとかなりそうだ…
天之河の〝天翔閃〟でトラウムソルジャーが薙ぎ払われる。
「皆！　諦めるな！　道は俺が切り開く！」
そんなセリフを吐きながら天之河は〝天翔閃〟を再び放つ。
少しずつ皆が活気づいてくる。
「お前達！　今まで何をやってきた！　訓練を思い出せ！　さっさと連携をとらんか！
馬鹿者共が！」
メルドさんの声でパニックがほぼ収まった。
白崎がサラッと使った魔法の効果もあるのかもしれない。

騎士団の人達も参戦し、完全に戦況がひっくり返った。
魔法陣による召喚が間に合っていない。
「皆！　続け！　階段前を確保するぞ！」
そのままの勢いで階段へたどり着く。
だが、登ろうとしない騎士団の人達に皆は怪訝な顔をする。
「皆、待って！　南雲くんを助けなきゃ！　南雲くんがたった一人であの怪物を抑えてるの！」
皆の頭に？が増える。
そりゃそうだ。皆からしたらハジメは”無能”なのだから。
だが白崎の言ったことは事実だ。
「なんだよあれ、何してんだ？」
「あの魔物、上半身が埋まってる？」
「そうだ！　坊主がたった一人であの化け物を抑えているから撤退できたんだ！　前衛組！　ソルジャーどもを寄せ付けるな！　後衛組は遠距離魔法準備！　もうすぐ坊主の魔力が尽きる。アイツが離脱したら一斉攻撃で、あの化け物を足止めしろ！」
指示に従い、俺はトラウムソルジャーとの戦闘に入る。
視界の端に映り込んだ檜山のほの暗い笑顔を見なかったことにしながら。

しばらくして、ハジメの魔力が尽きたのか、ベヒモスが起き上がった。
ベヒモスがハジメを狙って飛び上がろうとしたその時、あらゆる属性の魔法がベヒモスに向かって放たれる。
ダメージはそこまで無いようには見えるが、足止めにはなっている。
ハジメが走ってくる。もう３０ｍくらいは離れただろうか。
これで皆無事で済んだな…
そう思った時だった。
ベヒモスへと放たれたはずの魔法の一つがハジメに向かって軌道を曲げたのだ。
直撃こそしなかったものの、衝撃でベヒモスの方へ吹き飛ばされてしまう。
フラフラと立ち上がったハジメに、ベヒモスが追撃を入れようとする。
ハジメはギリギリ避けられたが橋の方が限界だった。
今までの戦闘で入っていたヒビが広がり、大きな音を立てて橋が崩れだした。
ハジメがマズい！
俺は無我夢中で飛び出した。
ロックマウントとの戦闘で使ったアレはぶっつけ本番で制御が効かないから使えな

い。

限界突破ッ！

限界突破は自身のステータスを3倍に引き上げる技能。

使用後は体にとてつもない負荷がかかるが、この際そんなこと気にしてられない。

俺は全力で走った。

だが、間に合わなかった。

目の前でハジメが掴んでいた場所が崩れ落ちた。

底の見えない奈落へ真っ逆さまに落ちて行く。

その瞬間、限界突破の制限時間がきて俺は意識を失った。

そうして俺は大切な親友を失った。

7話　覚醒

目を覚ますとそこは王宮の自室だった。
どうやら夜中みたいだ。
頭が痛い。
俺は確か……
『あ、やっと起きた？』
な、なんだ？
今頭の中から声がしたぞ？
気のせいか？
『気のせいじゃないよ～』
返事を返してきた。
どうやら幻聴ではないらしい。
しかも心を読んでくる。
じゃあ取り敢えず聞きたいんだが。
『ん？どうしたの？』

俺はどれくらい寝てたんだ？

『そうだね……1週間と2日くらいかな？』

そうか……

『そうだ、まず色々説明しないとね。』

そういえば、完全に忘れてた。

この得体の知れない何かは何だ？

『まずは自己紹介から。私の名前はアルビオン。君には私の体を取り戻す手伝いをしてほしい』

アルビオン……？

なんかどっかで聞いたような……

『多分君の世界にも居たんじゃないかな？　名前が同じだけで基本的には別物だよ』

そうなのか……

体を取り戻すって言うのは？

『それについてはかなり長くなるけど良い？』

問題ない。

『それじゃあまず昔話からかな』

そうして彼女は本当に長い昔話を始めた。

私はこの世界を創った龍なんだ。
ただ、1人で世界の理を管理し続けるには限界があった。
だから自分自身の魔力から自分の写し身、つまり分身を作り上げた。
けど、その内の1体が私に反旗を翻した。
少しずつ、少しずつ、世界を掌握していった。
私が気付いた時にはもう遅かった。
彼、”エヒト”が世界を自由に操れるようになっていた。
他の分身も彼の側に付き、私はこの地に堕とされた。
そうしてこの世界はエヒトのおもちゃになった。
あいつは人間族、魔人族、亜人族を創り戦争させて遊ぶようになったんだ。
それから数百年後。
エヒトの目的に気付き反逆を試みる者達が現れた。
それが”解放者”…今で言う”反逆者”だ。
彼らは順調に仲間を増やしていたけど、エヒトによって壊滅させられた。
人々が皆、彼らに刃を向けたんだ。
私はその時、魔人族の人達との戦闘を受け持った。

その際に現れた私と瓜二つの赤い龍と相討ちになった。
そして解放者の7人の幹部は大迷宮を創り未来に託し、私は体を都合の良い魔力タンクとして埋められ、その上に教会ができた。

『私はエヒトを殺す。その責任がある。その為に体を取り戻す手助けをしてほしい』
でも俺はただ元の世界に帰りたいだけなんだが。
もうハジメも……
『ハジメ…確か君の親友だったよね。あの時奈落へ落ちた』
ああ。
『彼ならまだ生きている』
は?
今なんて?
『ハジメは奈落の底で生きている。少なくともね』
そうか…
ん?少なくとも?
『あぁ、彼が生きていることは確かだけど、今どんな状況にあるかは分からない。助けに行く必要があるかもね』

それはいつでも確認できるのか？
『うん、できるよ』
ならしばらくは安心か。
そういやなんで神に喧嘩を売る必要があるんだ？
帰るだけならそんな必要なくないか？
『いいや、元の世界に帰るなら必ずエヒトをどうにかしなきゃいけない』
理由は？
『あいつが君たちを呼んだのはゲームを面白くするためだ。そんな大事な駒をそう簡単に手放す訳がない』
マジか…ベヒモスにすら勝てないのに……
『そんな君に相談がある』
え？
『君を強くする方法がある。私の力も使えるようになるだろうし、親友だって助けられる』
そんなことができるのか？
『できる。ただ、とてつもない苦痛に襲われるだろう。それこそ死んだ方がマシに思えるほど』

それは……

『さぁ選ぶといい。誰かに任せて部屋で縮こまるか、自らを顧みず神殺しを成すか』

分かった。やるよ。

ハジメが生きているのなら助けに行きたい。

『分かった。それじゃあ早速始めるよ』

一瞬身体中に電撃が走ったように感じた。

次の瞬間全身にもの凄い痛みが駆け巡る。

痛い。熱い。

声も出せず悶えることしかできない。

そんなのが1~2時間続いた。

『よし、これで終わり』

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

白浪リュート　１６歳　男　レベル：１０

天職：龍騎士

筋力：１８００

体力：１０００

耐性：１６００

敏捷：３０００
魔力：５４００
魔耐：４０００
技能：全属性適正・全属性耐性・複合魔法・魔力操作・剣術・槍術・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・創世魔法・言語理解

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

よく分からん技能が生えてるな

魔力操作ってなに？

『文字通り魔力を操作できる。魔法陣無しでも魔法が使えるようになるよ』

じゃあ創世魔法は？

『それが私の力。魔力を消費してありとあらゆる物を創り出す魔法。技能でも、武器でも、何でも創れる。創るものに応じた量魔力を消費するけどね』

じゃあ早速なんだけど、アーティファクトって創れる？

『できるけどコスパがだいぶ悪いんだよね。アーティファクトが創れるようになる技能の方が安上がりかな』

じゃあそれで。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

白浪リュート　１６歳　男　レベル：１０
天職：龍騎士
筋力：１８００
体力：１０００
耐性：１６００
敏捷：３０００
魔力：５４００
魔耐：４０００
技能：全属性適正・全属性耐性・複合魔法・錬成・魔力操作・剣術・槍術・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・生成魔法・創世魔法・言語理解
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

錬成は分かるが生成魔法ってのは？
『簡単に言うと物質に魔法を付与することができるようになる』
なるほど。
なんかいきなり頭が回らなくなってきた。
『魔力の使いすぎかな？ゆっくり休んで』
分かった。

明日から1週間くらいは技能を取得にアーティファクト作成、それに現状把握かな。
そのあとは一度オルクス大迷宮を目指そう。
メルドさんから地図とかもらえるかな？
取り敢えず、これからよろしく。アルビオン。
『うん、よろしくね』
そうして俺は眠りに付いた

8話　攻略開始

次の日に気付いたのだが、変化の影響が体にも現れていたらしい。
髪の毛の毛先の方だけが白く染まり、右の瞳が金色になった。
アルビオンの人間態がこんな感じの白髪金眼らしい。
確認しに来た恵里もだいぶ驚いてた。
恵里に現状を聞いてみたんだが、どうやらハジメは死亡したということになったらしい。
お偉いさん方は”無能”であったことに安堵していたようだ。
ただ、クラスの方はだいぶ危ない状況にある。
ただの学生が死を目の当たりにしたのだ。トラウマになってもおかしくない。
事実既に半数以上が戦うことを拒否しているらしい。
さらに愛子先生の抗議によって訓練の参加が任意になった結果、残ったのは天之河組と不良組辺りのみになった。
俺は訓練に参加しないことにした。ステータスとかのせいで変なことになりそうだったからだ。

恵里への諸々の説明は済ませてある。だいぶ変な顔されたけど。
天之河がなんか言ってきたが取り敢えずスルー。
その時間は技能取得とアーティファクト製作、あと魔法の鍛錬に取り掛かることになる。

それから1週間と5日後。
俺はいくつかの技能とアーティファクトを一つ、いや、二つ製作した。
前提として創世魔法は技能や武具にその素材まで、ありとあらゆるものを魔力を消費して創ることができる。これはこの世界、つまりトータスに無いものでも可能らしい。
ただし、派生技能については不可能。ちゃんと頑張れって言われた。
そうして割と自由に技能を取れた。
まずは”熱源感知”。あると便利そうだからダメ元で言ったらあった。
次に”潜影”。これはオリジナルのやつでだいぶ魔力を持ってかれた。効果は文字通り影に潜ることができる。
3つ目に”魔素吸収”。これも文字通り空気中に漂う魔素を吸収して魔力に変換する技能。

あとは”気配遮断”と”状態異常耐性”に”夜目”と”千里眼”、それと”空間魔法”をとった。
空間魔法は取った時魔力無くなってぶっ倒れたからまだ使ったことないが多分凄い性能してると思う。名前がもう強いし。
そしてアーティファクト。
一つ目は「約束された勝利の剣(エクスカリバー)」。
俺にとって最もイメージし易く、最も強い「剣」。
黄金の輝きを放ち、持ち主に勝利をもたらす「宝具」。
”魔素吸収”はこれを創る為に取ったまである。
正直カッコいいから創った。
風属性魔法と光属性魔法で「風王結界(インビジブル・エア)」もできる限り再現してある。
もう一つはその鞘「全て遠き理想郷(アヴァロン)」。
持ち主をあらゆる攻撃から護り、傷を即座に治癒する。
本家にはなかったがこっちにも一応インビジブル・エアをつけといた。
実はエクスカリバーを完成させた時に気が乗って創ったものだったりする。
そのせいで予定より数日遅れてしまった。
でもマジでカッコいい。

もう満足。

あと魔法の鍛錬の結果分かったのだが、俺は全属性適正があるが、そのうち風属性魔法と光属性魔法の二つに特に適正があるらしい。逆に闇属性魔法は殆ど使えなかった。

それで風属性魔法ばっかり練習してたらこの一週間くらいで風属性魔法を使って空をかなりの速さで飛べるようになった。

そろそろオルクスへ挑む時だ。

訓練組は既にオルクスへ向かっているから鉢合わせることがないように祈っておこう。

って言ってたら鉢合わせちまった……

２０層まで順調に攻略した俺は、あの時のグランツ鉱石を発見。ショートカットとして利用したのだ。

目の前ではクラスメイトがベヒモスと死闘を繰り広げている。

どうしようかなぁ……

『あれ、友達でしょ？助けないの？』

助けられないでしょ。訓練に参加しないで引き篭もってたやつがいきなりベヒモス

ぶっ飛ばしていくんだよ？だいぶおかしいでしょ。
『それは…確かに……』
変装したらどうにかなるかなぁ？
『やってみようよ！』
なんでそんなに乗り気なの…？
即席で仮面を作ってみた。あとは鎧の形状を少し変えて色も変える。ついでに長いマフラー首に巻いて完成。
これで誤魔化せるかはわかんないけど取り敢えず突撃。
ちょうどベヒモスの跳躍を障壁で受け止めたところだ。
インビジブル・エアを解除してエクスカリバーを引き抜き、走る。その勢いのまま後衛組の少し後ろで跳躍し、ベヒモスの角に全力で振るう。
まるでバターの様に刃が通り、ベヒモスの残っていた角が斬られる。
そのままバランスを崩し、ベヒモスは地面に落ちた。
「え……？」
誰かの困惑したような声が響いた。突然の乱入者に驚き、固まっているようだ。
だが、ベヒモスはまだ生きている。
俺はベヒモスに向き直り、「宝具」を解放する。

――束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流。――

そう呟きながら剣を構え直す。

本来は詠唱もタメも必要無いが、怪しまれないようにするためだ。

「エクス…カリバー!!!」

あの時の神威の何倍もの光がベヒモスを包み込む。

アニメやゲームで見たものとほぼ同じものが再現出来た。とても気持ちいい。

光が止んだ時、そこには既に生き絶えたベヒモスがいた。

『どう？アーティファクトの使い心地』

最っっっ高！

『それは良かった。さて、先を急ごうか』

「助けていただいてありがとうございます。あの、貴方は……？」

白崎が問いかけてくる。八重樫やメルドさんは警戒してるっぽいな。まぁそりゃそうか。

最強って呼ばれてた冒険者ですら刃が立たなかったヤツを、既に勇者が削ってたとはいえ倒したんだから。

にしてもなんて答えようか……本名をそのまま答える訳には行かないし……

アルビオン…リュート……

「……俺の名はアルト。ただの冒険者だ」

9話　再会

これで誤魔化せ……てないね！恵里がすっごいジト目でこっち見てる！
そらそうだ！エクスカリバーなんて分かりやすいもん持ってたらさぁ！
とか頭の中で喚いているとメルドさんが話しかけてきた。
「すまない、私はハイリヒ王国騎士団団長のメルド・ロギンスだ。助力に感謝する」
「いえ、通りかかっただけですから」
メルドさんはまだ警戒してるみたいだな。
怪しまれないうちにさっさと行くか。
「それでは私はこれで」
「待ってくれ！」
何故か引き留められた。何も怪しいことはしてないはず！
「なんです？」
「ここから下の階層の攻略の手助けをしてもらえないだろうか？」
なるほど。
「すみませんが断らせて頂きます」

「理由を聞いてもいいだろうか？」
　ここは正直に話すべきかな。
「実はここより更に下の階層に人を探しに来ているのです」
「こんなところに人を？」
「はい。しかし彼がいつまで持つかわからないのです」
「そうか…それは仕方がないな。引き留めてすまなかった」
「いえ、頑張ってくださいね」
　そう言ってこの場を後にする。
　やっぱりまだ怪しんでるな。まぁ丸く収まったし大丈夫でしょ。
『なんとかなったね』
　危なかったけどな。

　それから大体１ヶ月。
　俺はオルクスの最下層と言われる第１００層に辿り着いた。
　ここまでの階層はしらみ潰しに探してきたから残っているのはこの階層だけだ。
　アルビオンの話だとまだ生きてるみたいだから頑張るか。

全っ然いない。マジで何処？
二、三時間くらい探したが全然見つからない。
ハジメを探しながら走っていたとき、ふと視界に入り込んだものがあった。
不思議な模様が描かれた台座だ。そこには６つの穴が空いている。
何これ？
『あー…』
何？何か知ってるのか？
『これはオルクス大迷宮の入り口だね』
は？何言ってんの？
『解放者が大迷宮を作ったって話はしたでしょ？その目的って言うのがいつかエヒトに反逆する者が現れた時に解放者の力である”神代魔法”を継承するためなんだ』
そうだったのか。
『それでその人がエヒトに対抗できるかどうか試す意味も込めてそれぞれの大迷宮には”テーマ”とそれに対応する”試練”があるんだ。そしてここ、オルクス大迷宮のテーマは”強力な数多の魔物との豊富な戦闘を経て経験を積むこと”』
それとなんの関係が？

『実はこの場所はまだ途中で、この下にさらに１００層あるんだ』
は？
『そしてこの迷宮は最後に来ることになっている。つまり……』
つまりまだ俺じゃ入れないってことか？
『そういうこと。しかも彼はそっちにいるかも知れないんだ』
マジかー…
それじゃあどうにもならねぇじゃん。
どうすっかなぁ…
『あっ…！』
え!?何!?
『場所が変わった！』
はぁ!?
『今ちょうど彼の位置が変わった！彼は今ライセン大峡谷に居る！』
ええ…どうすりゃいいのよ……
『空間魔法使えばいいんじゃない？』
そういやあれどんな効果なの？
『簡単に言えば空間操作だね。ワープとか』

なるほどそういうことか。
じゃあやってみようか！

俺は空間魔法でホルアドの郊外に転移した。
本当一瞬で外に出られたな……
そういやどっちにいけばいいんだ？
『案内は任せて！』
頼んだ！
そう言って俺は空へ飛び上がった。
推進力は風属性魔法で、空気抵抗とかめんどくさいのも風属性魔法で。
光属性魔法で他の人から見えない様にして完璧。
よし！行くぞ！
『おーー！』

【ライセン大峡谷】

西にあるグリューエン大砂漠と東にあるハルツィナ大樹海との間を一直線に通る深さ1．２ｋｍ、幅は最大８ｋｍにも及ぶ大峡谷。

谷底には魔物が多数生息しており、しかも峡谷内では魔法が殆ど使えなくなり、仮に使おうとしても大量の魔力を必要とする。そのため処刑場として利用されていたこともある。

そんな所に魔法を使ってで飛び込んだらどうなるか。

纏っていた魔法の効果は切れ、推進力も無くなる。

つまりそのままの勢いで吹っ飛ぶ。

今俺はそんな状況だ。

『だから手前で止まろうって言ったのに～！』

なんとか目を開け前を見ると兵士っぽい人数十人と亜人族数十人、後目立つのが２人立っていた。

「よっ…避けて～!!」

ズザザザァァァ！

俺は結局制御できず、綺麗に顔面ダイブを決めた。

『だ…大丈夫……？』

死ぬほど痛いぞ。

一応アヴァロンで回復は出来たが一気に貯めてた魔力が無くなった。
また貯め直しかぁ…
「は？」
全員が固まっている。
仕方がないだろう。人間がものすごい勢いで目の前に突っ込んできたのだから。
『でもなんとか目的地には到着したね』
え？
ってことはここに……
「リュート…か……？」
この声、少し記憶のより低いけど間違いない。
「ハジメ、やっと見つけた」
そこにはとても古傷（黒歴史）が抉られるような見た目に変わり果てたハジメの姿があった。
こうしてようやく俺たちは再開することができた。
…だいぶダサいけど。

１０話　互いの事情

ずいぶんと締まらなくはあったが無事ハジメと再会出来た。
だいぶ雰囲気変わってるし、なんか隣に知らん人いるけど。
「おい、貴様」
……空気読めよ白けるなぁ
「何？」
「貴様は何者だ」
「なんで答えなきゃいけない？」
「小僧、口の聞き方を弁えろ。俺を帝国の兵士とわかって言っているのか？」
「ごめんわかんなかった。まさかこんなやつらが帝国の兵だとは思わなくて」
「きっ…貴様ァ！」
ちょっと煽っただけで斬りかかってきやがった。
実力主義って聞いてたからちょっと拍子抜けだな。
「相手の実力も見抜けないなんて、本当に帝国の兵かよ」
未だ不可視のエクスカリバーを抜き、纏う風を圧縮する。

残ってる魔力全部消えるけどまぁなんとかなるでしょ。
「…「風王鉄槌（ストライク・エア）」っ！」
風は嵐となって帝国兵を薙ぎ払う。
もう殆ど残ってなかったと思うんだけど相手が弱かったのかエクスカリバーが強すぎるのか。
「ひ、ひぃぃ！」
撃ち漏らしか。
と逃げようとした兵士に斬りかかろうとした時だった。
「ストップ」
とハジメが待ったをかけた。
「なんで？」
「聞いておかなきゃいけないことがある」
そう言って帝国兵に歩み寄っていき、こめかみに銃を突きつけた。
「た、頼む！　殺さないでくれ！　な、何でもするから！　頼む！」
「そうか？　なら、他の兎人族がどうなったか教えてもらおうか。結構な数が居たはずなんだが……全部、帝国に移送済みか？」
そういうことか。

後ろにいた兎人族にはまだ全員勢揃いってわけじゃないらしい。
「……は、話せば殺さないか？」
「お前、自分が条件を付けられる立場にあると思ってんのか？　別に、どうしても欲しい情報じゃあないんだ。今すぐ逝くか？」
「ま、待ってくれ！　話す！　話すから！　……多分、全部移送済みだと思う。人数は絞ったから……」
つまり売れるヤツだけ送って他は殺したってことか。
それを聞いてハジメは兎人族を一瞥してからトリガーに指をかけた。
「待て！　待ってくれ！　他にも何でも話すから！　帝国のでも何でも！　だから！」
ドパンッ！
トリガーはそのまま引かれ、帝国兵の頭を撃ち抜いた。
無慈悲ではあるが選択としては正しいだろう。
「あ、あのさっきの人は見逃してあげても良かったのでは……」
1人だけ白髪のよく目立つ兎人族が問いかける。
それに対し金髪の幼女が反論する。
「……一度、剣を抜いた者が、結果、相手の方が強かったからと言って見逃してもらおうなんて都合が良すぎ」

「そ、それは……」
「……そもそも、守られているだけのあなた達がそんな目をハジメに向けるのはお門違い」
「……」
どうやらこの幼女は怒っているようだ。
ハジメはおそらく奈落の底で会ったのだろうこの幼女とずいぶん仲を深めたらしい。怒っている理由はハジメに対して恐怖の視線を向けたことの様だ。
「ふむ、ハジメ殿、申し訳ない。別に、貴方に含むところがあるわけではないのだ。ただ、こういう争いに我らは慣れておらんのでな……少々、驚いただけなのだ」
「ハジメさん、すみません」
兎人族の代表らしき人物と白髪の兎人族が謝罪するが、ハジメは気にしてないのかヒラヒラと手を振るだけだった。
ハジメは残った馬車の方へ向かっていく。樹海まではまだだいぶ距離があったしせっかくだから有効活用しようってことなのだろう。
ハジメは何処からともなく車を取り出して馬車に……
車!?
え、なんで車?どう言うこと?

「ちょっと待てハジメ」
「ん？なんだ？」
「なんだその車」
「あぁ～…まぁ～……後にしないか？」
そういえばびっくりして頭からすっぽ抜けてたが兎人族がいるんだった。
さっさと樹海に行く方が先か。
「ほら、お前らは馬車の荷台ださっさと乗れ」
「は、はい！」
「リュートは後部座席だ」
「あ、着いてっていいのか」
「当たり前だろ？戦力としては十分だし、正直お前がいた方が心強い」
「そういうことならよろしく」
そのまま車に乗り込む。全員が乗り込んだことを確認し、そのまま車は峡谷上の平原を走り出した。
「…そういやハジメ、その子とはどういう関係なんだ？」
「ユエのことか？そうだな…どこから話すか……」

そうしてハジメは少しずつユエと呼ばれてた幼女との出会いを語り出した。
奈落の底の大体５０階層にデカい扉があったこと、そこにユエが封印されていたこと、そこから2人で大迷宮を攻略したこと。
「…っていうか俺のことは聞かなくていいのかよ」
「まぁ奈落の底でなんかあったんだなとは想像つくしな。生きてたからそれでよし」
「雑だなぁ…」
「んで結局どういう関係なんだよ」
質問にはユエが答えた。
「……私はハジメの女」
「へぇ～」
「なんだよその目は」
「いやお前ロリコンだったっけなって」
「ちげぇよ！そもそもユエは年上だ！」
「あ、そうなんだ」
合法ロリか。なるほど。
「ええっと…ユエさんでいいか？俺は……」
「……白浪リュート、でしょ？ハジメから聞いてる。ハジメの親友なら呼び捨てで構わ

ない」
「あ、そうなのか。じゃあよろしく、ユエ」
「……ん」
割といい感じに挨拶を終えることができたな。
「それじゃあこの車と銃についても教えて貰おうか」
「これか？これは大迷宮の最深部で貰った魔法で作ったんだ」
そう言えばアルビオンが魔法くれるって言ってたっけ。
「そんなことよりお前の事情の方を聞かせろよ。特にそのエクスカリバー、何処で手に入れたんだ？」
「そこかよ。まぁ色々長くなるぞ」
そう言って俺は今までの大体の流れを話した。
アルビオンのこと、その力”創世魔法”のこと、オルクス大迷宮を１００層まで攻略したこと。
「なるほどその力でエクスカリバーも作ったと」
「まぁそう言うこと」
そんな他愛もない話をしながら俺たちはハルツィナ大樹海へ向けて進んで行った。

１１話　樹海到着

数時間車を走らせ、俺たちはようやくハルツィナ大樹海の入り口までやってきた。
見た目は思ってたより普通の森だな。
「それでは、ハジメ殿、ユエ殿、リュート殿。中に入ったら決して我らから離れないで下さい。お三方を中心にして進みますが、万一はぐれると厄介ですからな。それと、行き先は森の深部、大樹の下で宜しいのですな？」
「ああ、聞いた限りじゃあ、そこが本当の迷宮と関係してそうだからな」
今兎人族の族長であるカムとハジメの話で出てきた”大樹”というのは、このハルツィナ大樹海の最深部にある超巨大な木で、亜人族には”ウーア・ウルト”と呼ばれ神聖視されて居るのだとか。
「ハジメ殿、リュート殿、できる限り気配は消してもらえますかな。大樹は、神聖な場所とされておりますから、あまり近づくものはおりませんが、特別禁止されているわけでもないので、フェアベルゲンや、他の集落の者達と遭遇してしまうかもしれません。我々は、お尋ね者なので見つかると厄介です」
「ああ、承知している。俺もユエも、ある程度、隠密行動はできるから大丈夫だ」

「任せろ」
そう言ってハジメは”気配遮断”を使用し、俺はその影に潜った。
「ッ!? これは、また……ハジメ殿、できればユエ殿くらいにしてもらえますかな?」
「ん? ……こんなもんか?」
「はい、結構です。さっきのレベルで気配を殺されては、我々でも見失いかねませんからな。いや、全く、流石ですな!」
ハジメの”気配遮断”は索敵能力が高いとされる兎人族ですら見失うレベルのものらしい。
「ところで…リュート殿はどちらに?」
「ここだよ」
ハジメの影から顔を出す。
カムはまるで怪異でも見たかのような顔をする。
「そ…それは少し控えていただいてもよろしいですかな?少々心臓に悪い」
「了解した」
”潜影”はダメか。
風纏ってどうにかなるかな?
「どうだろうか?」

「はい、そのくらいで問題ありません」
そうして一行は大樹を目指して樹海を進む。
定期的に魔物と遭遇するものの、ハジメとユエが全て瞬殺していく。
遠距離攻撃少なくてやることが無さすぎる。
そのまま数時間くらい歩いただろうか。
今までとは違う、つまり魔物ではない気配が俺たちをとり囲んだ。
俺以外の皆は見当がついているのだろうか。なにやら表情が変わった。
「お前達……何故人間といる！　種族と族名を名乗れ！」
そう言って草むらから出てきたのは虎の耳と尻尾のついたマッチョだった。
既に剣を抜き、こちらを睨みつけている。
亜人族は種族のほかに部族もあったのか、知らなかった…
「あ、あの私達は……」
カムが弁明を試みるが、その前に虎の亜人が白髪の兎人族――シアを見つけ、目を見開く。
「白い髪の兎人族…だと？　……貴様ら……報告のあったハウリア族か……亜人族の面汚し共め！　長年、同胞を騙し続け、忌み子を匿うだけでなく、今度は人間族を招き入れるとは！　反逆罪だ！　もはや弁明など聞く必要もない！　全員この場で処刑する

！　総員かッ!?」

ドパンッ!!

問答無用で攻撃しようとしてきた虎の亜人に対し、ハジメは頬を掠めるように銃撃を行う。

自身の理解の範疇を逸脱した攻撃に場は凍りついた。

「今の攻撃は、刹那の間に数十発単位で連射出来る。周囲を囲んでいるヤツらも全て把握している。お前等がいる場所は、既に俺のキルゾーンだ」

「な、なっ……詠唱がっ……」

詠唱無しの強力な遠距離攻撃、それを連射できる。さらに味方の位置まで把握済みであると告げられる。

その証明とでも言うのか銃口をある一点に向けた。そこはちょうど他の亜人がいる所だ。

「殺るというのなら容赦はしない。約束が果たされるまで、こいつらの命は俺が保障しているからな……ただの一人でも生き残れるなどと思うなよ。だが、この場を引くというのなら追いもしない。敵でないなら殺す理由もないからな。さぁ、選べ。敵対して無意味に全滅するか、大人しく家に帰るか」

「……その前に、一つ聞きたい……何が目的だ?」

ハジメは自分たちの目的と、現状最も大樹が怪しいことを告げる。
それに対し、虎の亜人は一つの判断を下した。
「……お前が、国や同胞に危害を加えないというなら、大樹の下へ行くくらいは構わないと、俺は判断する。部下の命を無意味に散らすわけには行かないからな。だが、一警備隊長の私ごときが独断で下していい判断ではない。本国に指示を仰ぐ。お前の話も、長老方なら知っている方もおられるかもしれない。お前に、本当に含むところがないというのなら、伝令を見逃し、私達とこの場で待機しろ」
この状況でこれだけ冷静な判断ができるとは。
この亜人割と優秀だな？
「……いいだろう。さっきの言葉、曲解せずにちゃんと伝えろよ？」
「無論だ。ザム！　聞こえていたな！　長老方に余さず伝えろ！」
「了解！」
少々考え込んだ結果、ハジメは提案に乗った。銃を仕舞い、警戒を解く。
今なら勝てるとでも思ったのか一部の亜人が臨戦態勢になるが、ハジメはしっかりと気付いて不敵に笑う。
「お前等が攻撃するより、俺の抜き撃ちの方が早い……試してみるか？」
「……いや。だが、下手な動きはするなよ。我らも動かざるを得ない」

「わかってるさ」

そうして、包囲こそそのままだが一段落ついたことがわかり、カムたちも安堵の吐息が漏れる。

まだあんまりハウリア族の状況を理解してない俺は黙りこくっているしかないのだった。

１２話　到着

あれから1時間くらい経っただろうか。
近付いてくる気配を察知し、場に緊張が走る。
さっきまでのゆるさが嘘みたいだ。
霧の奥から数人の亜人が姿を現した。
その中でも特に目を引くのが金髪碧眼の初老くらいの男。
耳が尖っている。つまり森人族、俗に言うエルフだ。
「ふむ、お前さん達が問題の人間族かね？　名は何という？」
「白浪リュートです」
「ハジメだ。南雲ハジメ。あんたは？」
「私は、アルフレリック・ハイピスト。フェアベルゲンの長老の座を一つ預からせてもらっている。さて、お前さんの要求は聞いているのだが……その前に聞かせてもらいたい。〝解放者〟とは何処で知った？」
「うん？　オルクス大迷宮の奈落の底、解放者の一人、オスカー・オルクスの隠れ家だ」
解放者の方なのか、目的じゃなく？

やっぱよくわかんないな。
諸々全部ハジメに任せておくか。
「ふむ、奈落の底か……聞いたことがないがな……証明できるか？」
「証明っつってもなぁ…」
「……ハジメ、魔石とかオルクスの遺品は？」
「ああ！　そうだな、それなら……」
ハジメは手を叩き、〝宝物庫〟から地上ではありえない質の魔石を取り出してアルフレリックに渡す。
「こ、これは……こんな純度の魔石、見たことがないぞ……」
「後は、これ。一応、オルクスが付けていた指輪なんだが……」
そう言ってハジメが取り出したのは一つの指輪。
その指に刻まれた紋章を見たアルフレリックが目を見開いた。
「なるほど……確かに、お前さんはオスカー・オルクスの隠れ家にたどり着いたようだ。他にも色々気になるところはあるが……よかろう。取り敢えずフェアベルゲンに来るがいい。私の名で滞在を許そう。ああ、もちろんハウリアも一緒にな」
その発言に対し、周りの亜人たちから抗議の声が上がる。
そりゃそうだろう。本来なら人間族は入れないのだろうから。

「彼等は、客人として扱わねばならん。その資格を持っているのでな。それが、長老の座に就いた者にのみ伝えられる掟の一つなのだ」
　どういうことだ？
『この樹海に隠れ家を持つ解放者は亜人族だからね』
　なるほどな
　っていうか今までどうしてたんだ？なんも喋ってなかったけど。
『疲れて寝てた』
　そうだったのか、すまん。オルクスじゃかなり頼りっぱなしだったからな。
『いいよいいよ。私も無理難題押し付けたみたいな所あるし』
「待て。何勝手に俺の予定を決めてるんだ？　俺は大樹に用があるのであって、フェアベルゲンに興味はない。問題ないなら、このまま大樹に向かわせてもらう」
「いや、お前さん。それは無理だ」
「なんだと？」
「大樹の周囲は特に霧が濃くてな、亜人族でも方角を見失う。一定周期で、霧が弱まるから、大樹の下へ行くにはその時でなければならん。次に行けるようになるのは十日後だ。……亜人族なら誰でも知っているはずだが……」
　え？そうなの？

チラッと案内役のカムを見てみると……

「あっ」

今まさに思い出したと言わんばかりの表情で立っていた。

「カム？」

「あっ、いや、その何といいますか……ほら、色々ありましたから、つい忘れていたといいますか……私も小さい時に行ったことがあるだけで、周期のことは意識してなかったといいますか……」

そう言い訳をするカムだったが、ハジメとユエのジト目に耐えきれず、遂には逆ギレをしだした。

「ええい、シア、それにお前達も！　なぜ、途中で教えてくれなかったのだ！　お前達も周期のことは知っているだろ！」

「なっ、父様、逆ギレですかっ！　私は、父様が自信たっぷりに請け負うから、てっきりちょうど周期だったのかと思って……つまり、父様が悪いですぅ！」

「そうですよ、僕たちも、あれ？　おかしいな？　とは思ったけど、族長があまりに自信たっぷりだったから、僕たちの勘違いかなって……」

「族長、何かやたら張り切ってたから……」

逆ギレするカムに、更にシアが逆ギレし、他の兎人族たちもさりげなく責任をなすり

つけていく。
「お、お前達！　それでも家族か！　これは、あれだ、そう！　連帯責任だ！　連帯責任！　ハジメ殿、罰するなら私だけでなく一族皆にお願いします！」
「あっ、汚い！　お父様汚いですよぉ！　一人でお仕置きされるのが怖いからって、道連れなんてぇ！」
「族長！　私達まで巻き込まないで下さい！」
「バカモン！　道中の、ハジメ殿の容赦のなさを見ていただろう！　一人でバツを受けるなんて絶対に嫌だ！」
「あんた、それでも族長ですか！」
だめだこりゃ。
ハジメを恐れての責任の押し付け合い。
だいぶ収拾がつかなくなってきた。
「……ユエ」
「ん」
その光景を見て額に青筋を浮かべたハジメは、ユエに声をかける。
その言葉を聞いてユエは一歩前に出て右手を掲げる。
それに気付き、ハウリア達の顔が引き攣っていく。

「まっ、待ってください、ユエさん！　やるなら父様だけを！」
「はっはっは、何時までも皆一緒だ！」
「何が一緒だぁ！」
「ユエ殿、族長だけにして下さい！」
「僕は悪くない、僕は悪くない、悪いのは族長なんだ！」
ギャーギャー騒ぎ続けるハウリア達に対し、薄く笑みを浮かべ、ユエは静かに呟いた。
「〝嵐帝〟」
――――――アッーーーー!!!
空へ舞い上がるハウリアの面々。
同胞を攻撃されているはずなのだがこちらに敵意を向けることは無く、それどころか呆れた顔で空を眺めている。
コイツらに案内任せて大丈夫なのか……？
『もしもの時は私が案内するよ』
出来るの？
『この世界を創ったのは私だからね』
そりゃそうか。
じゃあその時は任せた

『うん、任せて』

そんな話をしながら俺も空を舞うハウリア達を眺めていた。

あの後ハウリア達が落ちてきてから、虎の亜人に先導されながら移動を始めた。

それから1時間と少し歩いていると、いきなり霧が晴れた。

正確には霧によってトンネルのようなものが作られている。

アルフレリックによると、道の端についている青い結晶、フェアドレン水晶と言うらしいのだが、何故かその水晶には霧も、魔物でさえ寄り付かないのだとか。

それからしばらく歩くと、巨大な門が見えて来る。樹と樹が絡み合ったアーチに木製の両開きの扉が付いている。

天然の樹によって防壁が形成されており、森の国って感じがする。

ギルの合図で門が開かれる。

その先には――――

直径が数十ｍはありそうな樹がそこかしこに生え、その幹の中に住んでいるのか、ランプの灯りが幹に開けられた窓から漏れ出している。

さらに、それに見合った太さの枝が絡み合って、空中回廊が出来上がっている。

エレベーターのようなものや、水路もあるようだ。
「ふふ、どうやら我らの故郷、フェアベルゲンを気に入ってくれたようだな」
「ああ、こんな綺麗な街を見たのは始めてだ。空気も美味い。自然と調和した見事な街だな」
「ん……綺麗」
「なんというか…言葉が出ないな」
純粋な称賛に、亜人族は勢いよく尻尾を振っている。
尻尾は基本的に動物とそこまで変わらないみたいだな。
俺たちはフェアベルゲンの住人達の、さまざまな感情のこもった視線を浴びながらアルフレリックが用意した場所へ向かった。

１３話　会議

「……なるほど。試練に神代魔法、それに神の盤上か……」

今俺たちはアルフレリックと話をしている。

内容としては、解放者や神代魔法のこと、自分たちが異世界から来ているということ、七大迷宮を攻略することで元の世界に帰れるかもしれないということ等だ。

アルフレリックはこの世界のことを聞いても特に顔色は変わらなかった。曰く、「この世界は亜人族に優しくはない、今更だ」だそうだ。

ひと通り話を聞いたあと、アルフレリックは長老に代々伝わる掟について話し出した。

この地に七大迷宮の紋章を持つ者が現れたらたとえどのような人物であろうと敵対しないこと。

そしてその人物を気に入ったのであれば望む場所へ連れていくこと。

というかなり抽象的なものだった。

ハルツィナ大樹海の大迷宮の主、リューリティス・ハルツィナが自身が解放者であることと仲間の名前と共に伝えたのだという。

七大迷宮の紋章については大樹の根元の石碑に記されているのだとか。

「それで、俺は資格を持っているというわけか……」

人間である俺たちをここまで招き入れたことの理由がわかった。だが、それを長老しか知らないのならその他の亜人族との対応について話す必要があるだろう。

ハジメとアルフレリックが話を詰めようとした時、下の階から騒がしい音が聞こえてきた。

階下にはハウリア族が待機していたはず。

どうやら誰かと争っているようだ。

ハジメとアルフレリックは顔を見合わせ、立ち上がった。

俺もそれについていく。

階下では、熊、虎、狐、羽根付き、毛むくじゃらの小人といった亜人たちがハウリアを睨みつけていた。

部屋の隅で縮こまっており、カムがシアを庇っている。

既に殴られているようで、2人とも頬が腫れている。

「アルフレリック……貴様、どういうつもりだ。なぜ人間を招き入れた？　こいつら兎人族もだ。忌み子にこの地を踏ませるなど……返答によっては、長老会議にて貴様に処分を下すことになるぞ」

熊の亜人が拳を震わせながらそう言った。
人間はどうあっても憎い敵なのだろう。
そういえばハウリアはなんで虐げられてるんだ？
ハジメに聞いとけばよかった…
『シアって子が原因だね』
そうなのか？
そんな悪いやつには感じなかったけど…
『彼女は忌み子なんだ。亜人族は本来魔力を持たないんだけど、あの子はそれを持っている。あまつさえ魔力操作もできて、固有魔法もある。
これが魔獣のようだと忌み嫌われているんだ』
『ハウリアはそれを匿った。それが原因で罪人として扱われ、一族皆あんな仕打ちを受けることになったって感じだね』
なるほど。
ありがとう。
「なに、口伝に従ったまでだ。お前達も各種族の長老の座にあるのだ。事情は理解できるはずだが？」
「何が口伝だ！　そんなもの眉唾物ではないか！　フェアベルゲン建国以来一度も実行

されたことなどないではないか！」
「だから、今回が最初になるのだろう。それだけのことだ。お前達も長老なら口伝には従え。それが掟だ。我ら長老の座にあるものが掟を軽視してどうする」
「なら、こんな人間族の小僧が資格者だとでも言うのか！　敵対してはならない強者だと！」
「そうだ」
おそらくここにいるやつらが今の長老なんだろう。
だが、掟についての認識が一致していないらしい。
アルフレリックはその掟を重視しているが、その他は「眉唾物」の発言の通り、ろくに信じていないようだ。
信じられないものに従う意味もない。
それより人間族や罪人がここにいるのが許せない。
そんなところだろうか。
「……ならば、今、この場で試してやろう！」
そう言って熊の亜人がハジメへと殴り掛かった。
その剛腕がハジメへと振り下ろされる。
……が、その腕は途中で止まっていた。

もちろん、ハジメが受け止めたのだ。
「……温い拳だな。だが、殺意を持って攻撃したんだ。覚悟は出来てるだろ？」
そうしてハジメはどんどん力を…いや、義手で受け止めたので魔力を込めていく。
「ぐっぅ！　離せ！」
腕を引き戻そうとするが、ハジメはビクともしない。
ハジメは無言で魔力を込め続け、握力を一気に高めていく。
バキッ！
「ッ!?」
熊の亜人の腕から音が鳴った。
おそらく折れたのだろう。
そのままハジメは懐へ飛び込み、左腕を引く。
「ぶっ飛べ」
ドパンッ！
肘に搭載されていたショットガンの勢いも乗せた突きが熊の亜人の腹に突き刺さる。
熊の亜人はくの字に体を曲げ、壁を突き破って吹き飛んでいった。
悲鳴が聞こえたので無事なんだろう。
「で？　お前らは俺の敵か？」

そのあとアルフレリックがなんとか執り成し、その場を治めることに成功した。
現在、当代の長老衆である虎人族のゼル、翼人族のマオ、狐人族のルア、土人族（いわゆるドワーフ）のグゼ、そして森人族のアルフレリックが、ハジメと向かい合って座っていた。
ハジメの傍らにはユエとカム、シア、あと俺が座り、その後ろにはその他のハウリアが座っている。
「で？　あんた達は俺等をどうしたいんだ？　俺は大樹の下へ行きたいだけで、邪魔しなければ敵対することもないんだが……亜人族・・・としての意思を統一してくれないと、いざって時、何処までやっていいかわからないのは不味いだろう？　あんた達的に。殺し合いの最中、敵味方の区別に配慮する程、俺はお人好しじゃないぞ」
ハジメのその言葉に長老たちが体を強張らせる。
「こちらの仲間を再起不能にしておいて、第一声がそれか……それで友好的になれるとでも？」
土人族のグゼが呻くように呟く。
「は？　何言ってるんだ？　先に殺意を向けてきたのは、あの熊野郎だろ？　俺は返り

討ちにしただけだ。再起不能になったのは自業自得ってやつだよ」
「き、貴様！　ジンはな！　ジンは、いつも国のことを思って！」
「それが、初対面の相手を問答無用に殺していい理由になるとでも？」
「そ、それは！　しかし！」
「勘違いするなよ？　俺が被害者で、あの熊野郎が加害者。長老ってのは罪科の判断も下すんだろ？　なら、そこのところ、長老のあんたがはき違えるなよ？」
「グゼ、気持ちはわかるが、そのくらいにしておけ。彼の言い分は正論だ」
気持ちが昂り、立ち上がりかけたグゼをアルフレリックが諌める。
その言葉に顔を歪め、音をたてながら座り込む。
「確かに、この少年は、紋章の一つを所持しているし、その実力も大迷宮を突破したと言うだけのことはあるね。僕は、彼を口伝の資格者と認めるよ」
狐人族のルアがそう言い、周りを見渡す。
翼人族のマオ、虎人族のゼルも思うところはあるようだが、同意を示した。
代表してアルフレリックがハジメにその意を伝える。
「南雲ハジメ。我らフェアベルゲンの長老衆は、お前さんを口伝の資格者として認める。故に、お前さんと敵対はしないというのが総意だ……可能な限り、末端の者にも手を出さないように伝える。……しかし……」

「絶対じゃない……か？」
「ああ。知っての通り、亜人族は人間族をよく思っていない。正直、憎んでいるとも言える。血気盛んな者達は、長老会議の通達を無視する可能性を否定できない。特に、今回再起不能にされたジンの種族、熊人族の怒りは抑えきれない可能性が高い。アイツは人望があったからな……」
「それで？」
「お前さんを襲った者達を殺さないで欲しい」
「……殺意を向けてくる相手に手加減しろと？」
「そうだ。お前さんの実力なら可能だろう？」
「あの熊野郎が手練だというなら、可能か否かで言えば可能だろうな。だが、殺し合いで手加減をするつもりはない。あんたの気持ちはわかるけどな、そちらの事情は俺にとって関係のないものだ。同胞を死なせたくないなら死ぬ気で止めてやれ」
「ならば、我々は、大樹の下への案内を拒否させてもらう。口伝にも気に入らない相手を案内する必要はないとあるからな」
　虎人族のゼルのその言葉に、ハジメは訝しげな表情を向けた。
　そもそも案内はハウリアに任せるつもりでフェアベルゲンの手を借りる気は無かった。

「ハウリア族に案内してもらえるとは思わないことだ。そいつらは罪人。フェアベルゲンの掟に基づいて裁きを与える。何があって同道していたのか知らんが、ここでお別れだ。忌まわしき魔物の性質を持つ子とそれを匿った罪。フェアベルゲンを危険に晒したも同然なのだ。既に長老会議で処刑処分が下っている」

なんか変だなと思ったらそういうことか。

「長老様方！　どうか、どうか一族だけはご寛恕を！　どうか！」

「シア！　止めなさい！　皆、覚悟は出来ている。お前には何の落ち度もないのだ。そんな家族を見捨ててまで生きたいとは思わない。ハウリア族の皆で何度も何度も話し合って決めたことなのだ。お前が気に病む必要はない」

「でも、父様！」

シアは土下座して寛恕を請うが、ゼルに容赦はなかった。

「既に決定したことだ。ハウリア族は全員処刑する。フェアベルゲンを謀らなければ忌み子の追放だけで済んだかもしれんのにな」

シアは泣き出し、カムたちがそれを慰める。

「そういうわけだ。これで、貴様が大樹に行く方法は途絶えたわけだが？　どうする？　運良くたどり着く可能性に賭けてみるか？」

「お前、アホだろ？」
「な、なんだと！」
　まぁそうなるよなぁ…
「俺は、お前らの事情なんて関係ないって言ったんだ。俺からこいつらを奪うってことは、結局、俺の行く道を阻んでいるのと変わらないだろうが」
　ハジメは長老達を睨みつけながら泣き続けるシアに近づき、その頭に手をのせる。
「俺から、こいつらを奪おうってんなら……覚悟を決めろ」
「ハジメさん……」
　堕ちたな。
「本気かね？」
「当然だ」
「フェアベルゲンから案内を出すと言っても？」
「何度も言わせるな。俺の案内人はハウリアだ」
「なぜ、彼等にこだわる。大樹に行きたいだけなら案内人は誰でもよかろう」
　アルフレリックの言葉に面倒そうな表情をしつつ、シアをチラッと見る。
「約束したからな。案内と引き換えに助けてやるって」
「……約束か。それならもう果たしたと考えてもいいのではないか？　峡谷の魔物から

も、帝国兵からも守ったのだろう？　なら、あとは報酬として案内を受けるだけだ。報酬を渡す者が変わるだけで問題なかろう。」

「問題大ありだ。案内するまで身の安全を確保するってのが約束なんだよ。途中でいい条件が出てきたからって、ポイ捨てして鞍替えなんざ……」

ハジメは一度言葉を切り、ユエの方を見る。

ユエはハジメを見ており、目が合うと僅かに微笑む。

それに苦笑し、肩をすくめながらハジメはアルフレリックに向き合い、言った。

「格好悪いだろ？」

ハジメに引く気は一切無いと悟ったのか、アルフレリックは深くため息を吐いた。

他の長老達はどうするのかと顔を見合わせる。

しばらくして、なんだか疲れたような顔をして、アルフレリックが提案した。

「ならば、お前さんの奴隷ということにでもしておこう。フェアベルゲンの掟では、樹海の外に出て帰ってこなかった者、奴隷として捕まったことが確定した者は、死んだものとして扱う。樹海の深い霧の中なら我らにも勝機はあるが、外では魔法を扱う者に勝機はほぼない。故に、無闇に後を追って被害が拡大せぬように死亡と見なして後追いを禁じているのだ。……既に死亡と見なしたものを処刑はできまい」

「アルフレリック！　それでは！」

とんでもない屁理屈だ。
他の長老たちも驚きの目を向ける。
「ゼル。わかっているだろう。この少年が引かないことも、その力の大きさも。ハウリア族を処刑すれば、確実に敵対することになる。その場合、どれだけの犠牲が出るか……長老の一人として、そのような危険は断じて犯せん」
「しかし、それでは示しがつかん！　力に屈して、化物の子やそれに与するものを野放しにしたと噂が広まれば、長老会議の威信は地に落ちるぞ！」
「だが……」
２人の議論に他の長老も加わる。
既に決定したことを後から捻じ曲げようとしているのだ、そう簡単にはいかない。
「ああ～、盛り上がっているところ悪いが、シアを見逃すことについては今更だと思うぞ？」
空気を読まないハジメの言葉に、長老たちの議論がピタっと止まる。
ハジメはおもむろに袖を捲り、魔力操作を行う。
皮膚の内側に赤い線が浮かぶ。
ついでに腕にスパークが走る。
「俺も、シアと同じように、魔力の直接操作ができるし、固有魔法も使える。次いでに言

えばこっちにいるユエとリュートもな。あんた達のいう化物ってことだ。だが、口伝では〝それがどのような者であれ敵対するな〟ってあるんだろ？　掟に従うなら、いずれにしろあんた達は化物を見逃さなくちゃならないんだ。シア一人見逃すくらい今更だと思うけどな」

ハジメの腕を見てしばらく固まっていた長老たちだったが、やがて顔を見合わせ話し始める。

しばらくして結論がでたのか、アルフレリックが深々とため息をついて決定を伝える。

「はぁ～、ハウリア族は忌み子シア・ハウリアを筆頭に、同じく忌み子である南雲ハジメの身内と見なす。そして、資格者南雲ハジメに対しては、敵対はしないが、フェアベルゲンや周辺の集落への立ち入りを禁ずる。以降、南雲ハジメの一族に手を出した場合は全て自己責任とする……以上だ。何かあるか？」

「いや、何度も言うが俺は大樹に行ければいいんだ。こいつらの案内でな。文句はねぇよ」

「……そうか。ならば、早々に立ち去ってくれるか。ようやく現れた口伝の資格者を歓迎できないのは心苦しいが……」

「気にしないでくれ。全部譲れないこととは言え、相当無茶言ってる自覚はあるんだ。

むしろ理性的な判断をしてくれて有り難いくらいだよ」
ハジメの言葉にアルフレリックは苦笑する。
他の長老たちも少しやつれているように見える。
そんな様子を見て肩をすくめ、ハジメは俺たちに立つよう促して立ち上がった。
ユエはずっとボーっとしていたが、話は聞いていたのか何も言わずに立ち上がった。
なんか丸く治ったようでよかった。
そんなことを思いつつユエに続いて立ち上がる。
しかし、ハウリアの面々はまだ現実を理解できていないのか呆然として立ち上がる気配がない。
そりゃそうだ、死ぬ覚悟してたのに死ななくて良くなったんだから。
「おい、何時まで呆けているんだ？　さっさと行くぞ」
その言葉に、ハウリアたちはあたふたしながら立ち上がり、ハジメの後を追う。
アルフレリックたちも俺たちを門まで送るようだ。
シアがオロオロとしながらハジメに尋ねる。
「あ、あの、私達……死ななくていいんですか？」
「？　さっきの話聞いてなかったのか？」
「い、いえ、聞いてはいましたが……その、何だかトントン拍子で窮地を脱してしまった

ので実感が湧かないといいますか……信じられない状況といいますか……」
他のハウリアたちもそんな感じらしい。
皆そろって困惑した表情を浮かべている。
そんなシアにユエが呟くように話しかける。
「……素直に喜べばいい」
「ユエさん？」
「……ハジメに救われた。それが事実。受け入れて喜べばいい」
「……」
その言葉にシアがそっと隣のハジメを見ると、ハジメは前を見ながら肩をすくめて言った。
「まぁ、約束だからな」
「ッ……」
完ッ全に堕ちたなコレ。
その予想は当たっていたのか、シアはハジメに全力で抱きつく。
「ハジメさ～ん！　ありがどうございまずぅ～！」
「どわっ!?　いきなり何だ!?」
「むっ……」

涙で顔をグシャグシャにしながらしがみつき、ハジメの肩に顔を押し付ける。
その様子を見てユエが不機嫌そうに呻るものの、特に何もせず反対側の手を取る。
シアの姿を見て命拾いしたことを実感したのか、ハウリアが皆で喜び合っている。
反対に長老衆は複雑そうな表情をしている。遠巻きには負の感情を向けている亜人族もいる。
またしばらくは、面倒事が続きそうだ。
そんなことを思いながら、俺はハジメの少し後ろをついていった。

１４話　訓練

「さて、そろそろ戦力増強するか」
『久々に落ち着いた時間をとれたからね、創造の時間と行こう』
今俺達は大樹付近に拠点を作り、そこで各自訓練なりをしている。
作られた拠点の周りにはしっかりとフェアドレン水晶が淡い光を……
そういやなんであるんだ？
…さてはあいつ盗んで来たな？後で説教しておくか。
取り敢えず今は置いといて、作業に取り掛かろう。
まずは武器だ。
現状エクスカリバーの破壊力が大きすぎる影響で洞窟内などの狭い場所では力を発揮しきれない。
かつライセン大峡谷のような魔法が使えない場所では能力のほぼ全てが機能不全に陥ってしまう。
これらの欠点を補える武器が欲しい。
『大鎌とかどうかな？カッコいいしロマンもある。銃と組み合わせればほぼ全距離に対

応できる！』

なんかテンション高いな。

『久しぶりだからね、作りたいものがいっぱいあるんだ。君に見せてもらったものもあるし』

……俺達は意識を共有している都合上自由に頭の中を覗くことができる。

その際コイツは俺の見てきたアニメやゲームの知識を手に入れた結果、いわゆる同類になってしまった。

というかそんなに作りたいんだ？体取り戻したあとでも遅くは無いだろうに。

『あれ？言ってなかったっけ？私たちはどっちの意識が表に出るかを入れ替えられるんだよ』

……初耳なんだが。

だがそれで合点がいった。

色々と作りたがっているのは意識を入れ替えたときに使いたいからか。

『そう言うこと』

だが取り敢えず鎌は却下。取り回しが最悪すぎる。

『ダメ？』

もっと使いやすいのがいい。

「う～ん……汎用性を求めるならやっぱり複合兵装じゃない？ガンブレードみたいな』
個人的には今のところ槍術が腐ってるから槍系がいいんだけど……
汎用性はそっちの方が高いよなぁ……

色々な武器を試しては消してを繰り返して約１０日。
目の前には一振りの槍と一丁の銃があった。
まずは槍。
これには”魔素吸収”と”魔素吸収”から生えた”魔法変換”が組み込まれている。
”魔法変換”は文字通り魔法を魔力、ひいては魔素の段階まで変換する技能だ。
この効果によって相手の攻撃魔法を切り裂き、結界などの防御魔法を無理矢理貫ける。
そして刺さるとものすごい勢いで魔力を吸う。
敵の無力化に特化した槍だ。
あとは風魔法によって投げた時に加速したりとか手元に帰ってきたりとかする。
そして銃。

かなり長い銃身とそこに沿うようにブレードが取り付けられている。
かなり大きいセミオートでマガジンは都度都度創生魔法で作ることにしている。
さらに弾丸を電磁加速させることも出来るようにしてある。
レールガンの諸々の問題点はファンタジー溢れる凄い鉱石で何とかした。
あとついでだが、魔法も放てるようにした。
銃身内で魔力を収束させ、トリガーを引くと同時に解放。普通の魔法より早く着弾する。
『名前とかどうするの？』
名前かぁ…
……ブリュンヒルド、とかにしようかな。
『は？』
冗談
取り敢えず名前はいいやめんどくさいし。
『えぇ～なんかつけようよカッコイイの』
なんなら好きなように付けてもいいよ
『よし、任せて！カッコイイの付けるから』
『そうだなぁ～……じゃあ今日から槍はヴィルシュペアーで、銃はホロウハートね！』

……一応由来とか聞いてもいいか？
『いや、ほら、ヴィルヘルムって槍っぽいの使ってなかったっけ？』
ヴィルヘルム……って偽りの王（コードキング）の方かよ
『そうそう。それをもじって』
『ホロウハートのほうは……ピッタリでしょ？君に』
まぁ……そうかもな
魔力はまだ余裕あるし技能も取っちゃうか

そうして現在の最終的なステータスはこんな感じになった
＝＝＝

敏捷：７５００
魔力：９８００
魔耐：８３００
技能：全属性適正［＋風属性効果上昇］［＋発動速度上昇］・全属性耐性・複合魔法・錬成・魔力操作［＋魔力放射］［＋魔力圧縮］［＋遠隔操作］・剣術・槍術・高速魔力回復・夜目・気配感知・魔力感知・熱源感知・限界突破［＋覇潰］・生成魔法・空間魔法・創世魔法［＋創造記録］・言語理解・魔素吸収［＋魔法変換］［＋遠隔操作］［＋魔力変換］・潜影［＋影移動］［＋影操作］・千里眼・魔纏・加速・逆鱗

＝＝＝

派生技能の中でも特筆すべきなのは”魔力変換”と”創造記録”だろう。
”魔力変換”は魔力から魔素ではなく物質から魔力への変換である。
今はまだその辺の石や葉くらいしか変換出来ないが、いつかはもっと規模のデカいものも変換出来そうな気がしている。
そして今回の更新で１番の有用性をもつのが”創造記録”だ。
この技能は一度創世魔法で作った物を暫くの間記憶し、名前などのトリガーによって瞬時に生成することが出来る。
その際消費魔力も半分以下に抑えられる。
今後ずっとお世話になることだろう。
今は取り敢えず銃のマガジンを記憶させておいた。
さて、そろそろ皆と合流するか。
『皆と会うのも久しぶりだね』
ハジメがハウリア族の特訓、ユエがシアの特訓してたんだっけ。
『強くなってるかな？』
多分大丈夫でしょ。

そうしてハジメの所へ行くと、ハジメは樹にもたれかかりながら瞑想をしていた。
「よっ、リュート。いい武器は創れたか？」
「おう。大分満足した」
「お前は割と優柔不断気味だから、１０日以内に間に合わないかと思ってたわ」
「お前な…まぁ結局完成したのは１０日目だから何も言えねぇけど」
「そういやハジメ、あのフェアドレン水晶どっから持ってきたんだ？」
「いや、それは、そのぉ……」
「お前なぁ……」
ちょうどその時、ユエとシアがこちらに歩いて来るのを確認した。
助かったと言わんばかりの笑みを浮かべながらハジメは二人に話しかける。
しょうがないから説教は今度にするか。
「お、二人とも、勝負は終わったのか？」
「結果はどうなったんだ？」
正直俺はユエが勝つと思ってはいたんだが、表情を見る限りシアが勝ったらしい。
「ハジメさん！　リュートさん！　聞いて下さい！　私、遂にユエさんに勝ちましたよ！　大勝利ですよ！　いや～、ハジメさんにもお見せしたかったですよぉ～、私の華麗

な戦いぶりを！　負けたと知った時のユエさんたらもへぶっ!?」
　ユエのジャンピングビンタがシアに突き刺さる。
　見事なもんだな。
「で、どうだった？」
「……魔法の適性はハジメと変わらない」
「ありゃま、宝の持ち腐れだな……で？　それだけじゃないんだろ？　あのレベルの大槌をせがまれたとなると……」
「……ん、身体強化に特化してる。正直、化物レベル」
「……へぇ。俺達と比べると？」
「……強化してないハジメの……六割くらい」
「マジか……最大値だよな？」
「ん……でも、鍛錬次第でまだ上がるかも」
「おぉう。そいつは確かに化物レベルだ」
　ハジメの六割ってなると……大体６０００程度か。
　そこまでいくならユエに勝てたのも納得できる。
「ハジメさん。私をあなたの旅に連れて行って下さい。お願いします！」
「断る」

「即答?!」

あぶね、吹き出すところだった。

１５話　同行と再会

「ハジメさん。私をあなたの旅に連れて行って下さい。お願いします！」
「断る」
「即答？」
　信じられない、といった表情のシアと残念な人を見る目で見ているハジメ。
　なんとなくこうなる気はしてたけど本当になるとは。
「ひ、酷いですよ、ハジメさん。こんなに真剣に頼み込んでいるのに、それをあっさり……」
「いや、こんなにって言われても知らんがな。大体、カム達どうすんだよ？　まさか、全員連れて行くって意味じゃないだろうな？」
「ち、違いますよ！　今のは私だけの話です！　父様達には修行が始まる前に話をしました。一族の迷惑になるからってだけじゃ認めないけど……その……」
「その？　なんだ？」
　なにやらいきなりモジモジしだすシア。
　なんかイライラしてきた。

一発ぶん殴っていいかコイツ。
『ダメだよ』
ダメか。
「その……私自身が、付いて行きたいと本気で思っているなら構わないって……」
「はぁ？　何で付いて来たいんだ？　今なら一族の迷惑にもならないだろ？それだけの実力があれば大抵の敵はどうとでもなるだろうし」
「で、ですからぁ、それは、そのぉ……」
「……」
モジモジしたまま答えようとしないシアに我慢の限界なのかドンナーに手を掛けるハジメ。
俺もいい加減拳を振り上げかけたその時。
「ハジメさんの傍に居たいからですぅ！　しゅきなのでぇ！」
「……は？」
まぁそんなことだろうとは思っていた。
『多分アレだよねぇ』
アレだろうなぁ。
当のハジメは訳がわからないと言わんばかりの表情を浮かべている。

「いやいやいや、おかしいだろ？　一体、どこでフラグなんて立ったんだよ？　自分で言うのも何だが、お前に対してはかなり雑な扱いだったと思うんだが……まさか、そういうのに興奮する口か？」

流石にタラシ過ぎないかコイツは。

アレとかコレとか全部無意識かよ、嘘だろお前。

「誰が変態ですか！　そんな趣味ありません！　っていうか雑だと自覚があったのならもう少し優しくしてくれてもいいじゃないですか……」

「いや、何でお前に優しくする必要があるんだよ……そもそも本当に好きなのか？　状況に釣られてやしないか？」

「状況が全く関係ないとは言いません。窮地を何度も救われて、同じ体質で……長老方に啖呵切って私との約束を守ってくれたときは本当に嬉しかったですし……ただ、状況が関係あろうとなかろうと、もうそういう気持ちを持ってしまったんだから仕方ないじゃないですか。私だって時々思いますよ。どうしてこの人なんだろうって。ハジメさん、未だに私のこと名前で呼んでくれないし、何かあると直ぐ撃ってくるし、鬼だし、返事はおざなりだし、魔物の群れに放り投げるし、容赦ないし、鬼だし、優しくしてくれないし、ユエさんばかり贔屓するし、鬼だし……あれ？　ホントに何で好きなんだろ？　あれぇ～？」

あれ？コイツ相当ヤバいヤツでは？

「と、とにかくだ。お前がどう思っていようと連れて行くつもりはない」

「そんな！　さっきのは冗談ですよ？　ちゃんと好きですから連れて行って下さい！」

「あのなぁ、お前の気持ちは……まぁ、本当だとして、俺にはユエがいるって分かっているだろう？　というか、よく本人目の前にして堂々と告白なんざ出来るよな……前から思っていたが、お前の一番の恐ろしさは身体強化云々より、その図太さなんじゃないか？　お前の心臓って絶対アザンチウム製だと思うんだ」

「誰が、世界最高硬度の心臓の持ち主ですか！　うぅ～、やっぱりこうなりましたか……ええ、わかってましたよ。ハジメさんのことです。一筋縄ではいかないと思ってました」

「こんなこともあろうかと！　命懸けで外堀を埋めておいたのです！　ささっ、ユエ先生！　お願いします！」

「は？　ユエ？」

「……ハジメ、連れて行こう」

「いやいやいや、なにその間。明らかに嫌そう……もしかして勝負の賭けって……」

「……無念」

今回の勝負の際に賭けられていたもの、それはおそらく「ハジメについて行く交渉の

際に後押しする」というようなものなのだろう。
この１０日間で死ぬ気でユエと戦い続けたのだろう。
ユエは仕方がないというような態度で肩を竦めている。
ハジメはチラッとこっちも見たが俺は我関せずといった態度で返した。
この場での決定権はお前にしか無いからな。
「付いて来たって応えてはやれないぞ？」
「知らないんですか？　未来は絶対じゃあないんですよ？」
「危険だらけの旅だ」
「化物でよかったです。御蔭で貴方について行けます」
「俺の望みは故郷に帰ることだ。もう家族とは会えないかもしれないぞ？」
「話し合いました。〝それでも〟です。父様達もわかってくれました」
「俺の故郷は、お前には住み難いところだ」
「何度でも言いましょう。〝それでも〟です」
「……」
「ふふ、終わりですか？　なら、私の勝ちですね？」
「勝ちってなんだ……」
「私の気持ちが勝ったという事です。……ハジメさん」

「……何だ」
「……私も連れて行って下さい」
「……はぁ～、勝手にしろ。物好きめ」
こうして俺らの旅に新しい仲間が加ったことになる。

「えへへ、うへへへ、くふふふ～」
同行を許されて上機嫌になったシアはさっきまでが嘘だったかのように
残念な姿をしていた
「……キモイ」
見かねたユエがボソッと呟く
残念ながら俺もそう思う。
「……ちょっ、キモイって何ですか！　キモイって！　嬉しいんだからしょうがないじゃないですかぁ。何せ、ハジメさんの初デレですよ？　見ました？　最後の表情。私、思わず胸がキュンとなりましたよ～、これは私にメロメロになる日も遠くないですねぇ～」
あまりにも調子に乗っている。

「「『……ウザウサギ』」」
「んなっ!?　何ですかウザウサギって！　いい加減名前で呼んでくださいよぉ～、旅の仲間ですよぉ～、まさか、この先もまともに名前を呼ぶつもりがないとかじゃあないですよね？　ねっ？」
「「……」」
「何で黙るんですかっ？　ちょっと、目を逸らさないで下さいぃ～。ほらほらっ、シアですよ、シ・ア。りぴーとあふたみー、シ・ア」
名前を呼ばせたがるシアを放置して今後の予定についての話し合いを始める。
それを見て「無視しないでぇ～、仲間はずれは嫌ですぅ～」と涙目で縋り付くシア。
扱いは仲間になっても変わらないらしい。
そんな時、霧を掻き分けて数人のハウリア人が魔物の一部を片手に戻ってきた。よく見るとその内の1人はカムのようだ。
が、何か様子がおかしい気がする。
「ボス。お題の魔物、きっちり狩って来やしたぜ？」
「ボ、ボス？と、父様？　何だか口調が……というか雰囲気が……」
明らかに様子がおかしい。
カムはもっと礼儀正しい人だったはずだ。

「……俺は一体でいいと言ったと思うんだが……」
「ええ、そうなんですがね？　殺っている途中でお仲間がわらわら出てきやして……生意気にも殺意を向けてきやがったので丁重にお出迎えしてやったんですよ。なぁ？みんな？」
「そうなんですよ、ボス。こいつら魔物の分際で生意気な奴らでした」
「きっちり落とし前はつけましたよ。一体たりとも逃してませんぜ？」
「ウザイ奴らだったけど……いい声で鳴いたわね、ふふ」
「見せしめに晒しとけばよかったか……」
「まぁ、バラバラに刻んでやったんだ、それで良しとしとこうぜ？」

「……誰？」

１６話　変貌

「ど、どういうことですか!?　ハジメさん！　父様達に一体何がっ!?」
「お、落ち着け！　ど、どういうことも何も……訓練の賜物だ……」
「いやいや、何をどうすればこんな有様になるんですかっ!?　完全に別人じゃないですかっ！　ちょっと、目を逸らさないで下さい！　こっち見て！」
「……別に、大して変わってないだろ?」
「貴方の目は節穴ですかっ！　見て下さい。彼なんて、さっきからナイフを見つめたままウットリしているじゃないですか！　あっ、今、ナイフに〝ジュリア〟って呼びかけた！　ナイフに名前つけて愛でてますよっ！　普通に怖いですぅ～」
　何があったのか詳しくはわからないがハウリア族全員の性格が激変している。
　あんなにも穏やかだったはずなのに…なんかこう…ワイルドな感じに変わってしまった。
『わぁ～お、すごいねこれ』
　言ってる場合か
「ハジメ、お前何を……」

「父様！　みんな！　一体何があったのです!?　まるで別人ではないですか！　さっきから口を開けば恐ろしいことばかり……正気に戻って下さい！」
「何を言っているんだ、シア？　私達は正気だ。ただ、この世の真理に目覚めただけさ。ボスのおかげでな」
「し、真理？　何ですか、それは？」
「この世の問題の九割は暴力で解決できる」
「やっぱり別人ですぅ～！　優しかった父様は、もう死んでしまったんですぅ～、うわぁ～ん」
　ついには泣きべそをかいて樹海へと走り去ろうとするシア。
　だが、小さな影にぶつかり、尻餅をついてしまう。
「あっ、ありがとうございます」
「いや、気にしないでくれ、シアの姐御。男として当然のことをしたまでさ」
「あ、姐御？」
　小さな子供でもダメらしい。
　もうかつてのハウリア族はいなくなったと考えても良さそうだ。
「ボス！　手ぶらで失礼します！　報告と上申したいことがあります！　発言の許可を！」

「お、おう？　何だ？」
「はっ！　課題の魔物を追跡中、完全武装した熊人族の集団を発見しました。場所は、大樹へのルート。おそらく我々に対する待ち伏せかと愚考します！」
「あ～、やっぱ来たか。即行で来るかと思ったが……なるほど、どうせなら目的を目の前にして叩き潰そうって腹か。なかなかどうして、いい性格してるじゃねぇの。……で？」
「はっ！　宜しければ、奴らの相手は我らハウリアにお任せ願えませんでしょうか！」
「う～ん。カムはどうだ？　こいつはこう言ってるけど？」
　話を振られたカムは不敵な笑みを浮かべ、強く頷いた。
「お任せ頂けるのなら是非。我らの力、奴らに何処まで通じるか……試してみたく思います。な～に、そうそう無様は見せやしませんよ」
「……出来るんだな？」
「肯定であります！」
　返事を聞いたハジメは大きく深呼吸をし、目を見開いて叫んだ。
「聞け！　ハウリア族諸君！　勇猛果敢な戦士諸君！　今日を以て、お前達は糞蛆虫を卒業する！　お前達はもう淘汰されるだけの無価値な存在ではない！　力を以て理不尽を粉砕し、知恵を以て敵意を捩じ伏せる！　最高の戦士だ！　私怨に駆られ状況判断

も出来ない〝ピッツー〟な熊共にそれを教えてやれ！　奴らはもはや唯の踏み台に過ぎん！　唯の〝ピッツー〟野郎どもだ！　奴らの屍山血河を築き、その上に証を立ててやれ！　生誕の証だ！　ハウリア族が生まれ変わった事をこの樹海の全てに証明してやれ！」

「「「

「うわぁ～ん、やっぱり私の家族はみんな死んでしまったですぅ～」
ハジメはよりによってハー〇マンを選択したらしい。
誰一人、何一つとして過去の面影はなく、そこにいるのは悪鬼の群であった。
「パルくん！　待って下さい！　ほ、ほら、ここに綺麗なお花さんがありますよ？　君まで行かなくても……お姉ちゃんとここで待っていませんか？　ね？　そうしましょ？」
最後の希望に縋り付くかのように先程の男の子を呼び止めるシア。
昔の彼は綺麗な花が大好きなかわいい男の子だったのだろう。
「姐御、あんまり古傷を抉らねぇでくだせぇ。俺は既に過去を捨てた身。花を愛でるような軟弱な心は、もう持ち合わせちゃいません」
「ふ、古傷？　過去を捨てた？　えっと、よくわかりませんが、もうお花は好きじゃなくなったんですか？」
「ええ、過去と一緒に捨てちまいましたよ、そんな気持ちは」
「そんな、あんなに大好きだったのに……」
「ふっ、若さゆえの過ちってやつでさぁ」
それが今はコレである。
なんて事をしてしまったのかあのバカ（ハジメ）は。
「それより姐御」

「な、何ですか？」
「俺は過去と一緒に前の軟弱な名前も捨てました。今はバルトフェルドです。〝必滅のバルトフェルド〟これからはそう呼んでくだせぇ」
「誰!? バルトフェルドってどっから出てきたのです!? ていうか必滅ってなに!?」
「おっと、すいやせん。仲間が待ってるのでもう行きます。では！」
「あ、こらっ！ 何が〝ではっ！〟ですか！ まだ、話は終わって、って早っ！ 待って！ 待ってくださいぃ～」
ぐっ……ウグァ……
今確実に掘り返してはいけない過去が出てきそうになった……
『大丈夫？』
ダメだ…もう無理かもしれない。
「……流石ハジメ、人には出来ないことを平然とやってのける」
「いや、だから何でそのネタ知ってるんだよ……」
「……闇系魔法も使わず、洗脳……すごい」
「……正直、ちょっとやり過ぎたとは思ってる。反省も後悔もないけど」
「反省はしろこの馬鹿野郎」
ハウリア族が去っていったあとには、シアの啜り泣く声と胸を押さえて苦しむリュー

ト、そしてなんとも言えない微妙な空気が流れていった。